
スナイパー & アサルト

ワヲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スナイパー＆アサルト

【NZコード】

N1846S

【作者名】

ワラン

【あらすじ】

オンラインシミューティングゲームで親友と遊んでたらフラッシュ食らってパソコン画面は真っ白！

ついでに自分達も真っ白！気づいたら一人して軍の医療室…まさかのゲームの世界にイン！？

狙撃手と歩兵のコンビが異世界トリップで世界戦争旅行！

第一発目

「おーい、咲樹
今日もやるか！」

俺、加藤咲樹（17）

放課後の教室掃除がちょうど終わると教室に出て呼び声に答える

「ああ、狙い撃ちまくつぜ」

成績は普通、家は居酒屋で夕方からは両親は仕事
ちなみに年齢＝彼女いない歴という悲しい現実

身長も悲しいことに少々低め

容姿は普通だが、たまに子供か女に間違われた
女に間違われてから髪を短くしたが、今度は身長で小学生高学年に
間違われた
なので髪は伸ばして顔を隠している

そして廊下待っていた親友とともに下駄箱へ向かう

親友もとい幼なじみの名前は、

倉橋薫（18）

年は一つ上だがほとんど兄弟のように育ってきた兄のような存在だ
自分の容姿で中学の時は一時期イジメがあった
だが、薫がイジメの黒幕を暴力というシンプルで黙らせたのだ
拳一発で

それからはイメージが起きなくなり薰と一緒にいる時間が多くなった

容姿は薄い茶髪に短いスポーツヘア

両親が共にボクシング関係の仕事なため腕っぷしが強いのだ

しかし、喧嘩はあまりせず成績は普通

普通の生徒である

そして二人が向かっているのはゲーセンにあるネットカフェ

二人が中学時代に見つけたオンラインゲームをやるためにある

暇つぶしに一人で寄った際に見つけたFPS——シューティングゲームであり、戦闘機など使えないがクレイモアやRPGなどといった現代戦争物であり自分が一人の軍人となりミッションをオンラインでクリアしながら世界を回るというゲームだ

もちろんチームデスマッチなど対戦などもでき、人気のゲームである名前は

「第三次世界大戦」

ちょっとベターだが内容はネットゲームにしては豊富なためあまり気にされていない

「じゃあ、咲樹

先制頼むぜ?」

「ああ、いつも通りやるよ

薫は突撃兵を好んで使う

AK-47、IMIガリルなどアサルトライフルやグルガナイフなど得意として敵を混乱させることをよくやってくれる

そして俺が

「ん、ふつ・・よし、通路空いたよ」

狙撃手を狙撃し、薫に伝える

俺はスナイパー

素早く狙撃し、一撃離脱を得意としてるが乱戦での狙撃も得意だSAKOTRG-21やWA2000、L96A1などあるが、俺はTRG-21を最も使っている

どのスナイパーライフルも威力はいいが、

こいつは命中率が高くオートマチックではなく、ボルトアクションなため、一撃が強い
一撃離脱にはうってつけだ

俺と薫はそのまま通路を進む

すると、カラソコロンと物体が自分達の前に飛び出す

(グレネード！？
いや、形が違う・・まさ)

「後ろ向け、咲樹！」

いち早く気づいた薫は指示を出すが時既に遅し

俺達の視界は一面、真っ白に包まれた

・・・二人の少年が借りた部屋には誰もおらず、この時、一人の存在は消えた

第一発明（前書き）

ひとつめはよくあるパターン「ドーナツ」

第一発目

「起きろ、サキ中尉！」

（うつせえー、誰だよこんな大声で起こす奴）

咲樹はゆっくり身体を起こし、目を開くと辺りは迷彩服を来た外国人…

例えるならアメリカ人のような人が忙しく動き回ってる
包帯をしてたり傷を塞いだりなどだ

（待て、待て

ここはどこ？日本？地球？
いや、地球か…けど目の前の人は黒人のヒゲだ
外国人だけど日本語喋ってる

あれ？俺って、英語こんなに理解できたっけ？

てか、俺はさつきネカフェにいて…そうだと薫は…？）

「すいません…薫も一緒にいませんでしたか？」

「力オル？

ああ、アレン大尉のことか？

お前達の部隊は敵の奇襲で壊滅だった

奇跡的に軽傷だったお前達一人だけは回収できたんだがな…

（？？何のことだ？

とつあえず、薰はアレンって人か）

「やつですか、アレンは今どうじで？」

咲樹は話を合わせると再び質問する

「今はテントの出口で中尉を待ってるやつだ」

「ありがとうございます」

咲樹はベッドから降りて、テントに向かいながらある違和感に気づく

（やけに胸が重・・）

胸を確認すると胸があつた
触つて見ると柔らかな感触・・・本物だ

（胸・・・胸え～！？

てか、デケエよ！

発育良すぎだろ！

また、また、またえ！

俺は男だよな？加藤咲樹、17歳

今まで彼女いない普通の男子高校生、プールも海パン
よし、記憶は男だ）

いつの間にかテントの出口についたのか
男達の視線に気付き、慌てて胸から手を離す

「お、咲樹！起きたのか」

「え？誰？」

右を見ると金髪のオールバックの少年といつより青年に近い男性が声を掛ける

「アレン、いや薰だ
わかるだろ？」

「薰～、よかつた～」

咲樹はホッと息をつくのも束の間、すぐに問い合わせる

「どうしよう、薰

俺、女になっちゃった！」

「おわ、ちょ・・・近い
落ち着け！」

薰は咲樹の手を掴むと人目の少ない空いてる車に向かった

「咲樹、落ち着いたか？」

「ああ、なんとか

けど、人目がないところ来てお前・・・

「し、しねえよ！／＼／＼

俺はそんな野蛮じゃねえ！」

咲樹は自分の身体を抱きしめるかのように一歩後ずさるが薰は慌てて否定した

「いいか、まずは記憶の確認だ

俺達は最後フラッシュュバン食らって気絶したよな？」

「ああ、それで気づいたらテントに歸て身体は変わってる」

「そのことについてだが、俺が最後使つてたキャラはアレンで大尉だ
髪型はヘルメットわからんかったけど金髪だった
咲樹はどうだ？」

「俺は・・・サキを使って中尉にレベル上がったからキャラコスア
イテム貰つてついでに使って・・・そうだレッドチームだから女性
キャラだつたんだ！」

まさか・・・ここつて

「ああ、もしかしたらあのゲーム内かもしれない」

二人は新たな現象に改めてことの重大差に気づかされた

「なあ、俺達

「ここで死んだらマジで死ぬのか？」

「だよな、俺達こんな成りだし戦場に出るんだと思つが生き残れる
のか？」

生きるチャンスは一発のみのゲームに

「薰・・・」

そうだ

死んだらゲームオーバーの世界

戦闘経験なんて皆無な自分達だ

だけど・・・咲樹は思った

「なあ、薫

確かに俺達、戦闘なんてやつたことないけどさ

もしここが第三次世界戦争の世界なら俺達はこの戦争の未来を知ってる

戦い方も知ってる

卑怯でもなんでもしててでも生き残つてやるつぜ

ゲームでは五年やって、三回キャラ作り直した敵を倒す勝率80%のコンビだろ?」

「咲樹・・・」

いつも励ましたり、守つたりする咲樹が今回、初めて励ましてくれた
薫はそんな咲樹に嬉しく思い、笑みを浮かべて頭を撫でる

「サンキュー、咲樹

ストーリー知つてんだ

いつそのこと、とこどん卑怯使つて生き残つてやるつぜ

「ああ、生き残ろう」

互いに拳を軽くぶつけ、テントに戻った

堅い決意を秘めて

第二発田（前書き）

短めです

第二発田

「どうあえず、俺の武器はつと・・・課金でカスタマイズしたからな」

「俺も、あのTRGじゃないと無理だ」

二人武器庫に行つており、回収されたはずの武器を探しに来ていた

「お、メイン武器は無事発見~」

「これじゃない・・・これは・・・ビンゴー」

しばらくして探した自分の武器を見つけ、テーブルに置く

「結構、重いんだな」

「ああ、こりやスナ構えながら移動は無理だな」

実際の重さを体験した二人はサブ、近接用ナイフ、クレイモア、投擲武器、メイン武器を確認すると新たな発見に気づいた

「なあ、普段ゲームだと持てる武器の数とか決まってたけど俺達はせ、自由なんだよな」

「だな、つて薰!?」

咲樹は何気なしに返事を返しながら薰の方を向くと、投擲グレネードを三つも所持していた

「チートなんて、俺達には関係ねえよ」

「うわあ～、お前とは戦いたくねえわ」

咲樹はちよつと引き気味に薰を見る

メインとサブ一挺だけでもチートなのにグレネードとフリッシュ、ショースタングレネードまで持ち出しており、クレイモアまであるのだ

白兵戦や市街戦だとかなり有利だらう

「咲樹、お前こそなんだ・・・どんだけ暗殺する気だそれと防御、上げすぐれ」

咲樹は替えのマガジンを計20個以上にクレイモアやモーションセンサー、心音センサーなど大量に持っている

「サイレンサーあれば結構倒せるからさー

市街戦だと芋ほづが倒せるんだと思つんだよね」

互いに、驚きながらも戦闘の準備をして、いつでも戦えるようにした

人物紹介（前書き）

二人の簡単な説明

人物紹介

加藤咲樹
かとうさき

高校一年生（17）

肩まである髪で前髪は顔半分を覆うほどである

父は居酒屋の板前

母は会計などホールを担当しており、夕方から深夜までいつも仕事をしている

なので昔から夜は隣の家の薫の家で過ごすことが多かった

身長は160 165

体重は52 49

階級は中尉で軍属の名前は

サキ=ミーシリア

金髪で腰までのロングヘア前髪は左目を少し隠してるのが特徴
目はサファイアブルーで日系フランス人風の顔立ち

余談だが、身長が少し高くなつたことに喜んだ咲樹だが胸がDカップ
ということに肩凝りが酷い代償に素直に喜べなかつた

山崎薫
やまざきかおる

高校三年生（18）

軽い茶髪で短めのスポーツヘア

父は元プロボクサーでボクシングジムの社長
母は元ボクシング実況で専業主婦

本来、受験生なのが体育会系の大学なので推薦をもらい、無事合格を決め、早めに咲樹と遊んでいたのである
咲樹と幼なじみであり、兄的存在

身長 178 180

体重 65 72

階級は大尉で軍属の名前は

アレン＝フォーマット

咲樹と同じく日系フランス人風である
髪は金髪のオールバック

第四発田（前書き）

咲樹の戦場

これはフィクションです

第四発目

『エリアクリー』

味方の一人が通信でそう告げてくる
今咲樹達がやっているのはアメリカのロサンゼルスにある貨物倉庫
が立ち並ぶ港の第三倉庫に来ている

ミッション内容は貨物内にある倉庫内部か倉庫付近にある貨物の爆
破である

倉庫にはソ連が対アメリカ用になる偽装された弾薬類があり、フラ
ンスからの情報により破壊するミッションである

『咲樹、仕掛けるから後方警戒頼む』

薰はそう伝えると咲樹が狙撃しやすい位地にC4爆弾を仕掛ける
解除されても狙撃で防ぐためだ
爆破ミッションの定石である

薰が設置し、味方と共に爆破地点から離れる

すると大きな銃声が響くと薰の横にいた味方の頭が吹き飛んだ
ブシャーと勢いよく脳内の臓物と血が吹き出した

『aign長!』

『バカ、隠れろ!-咲樹!-』

『了解』

慌てて仲間の亡骸に手を伸ばす味方を無理やり引きずり、急いで物陰に隠れる

そして咲樹はスコープを覗いた

(あれか、狙撃手は
あとはあのアサルト
情報だとあと一人いるはず・・・
まあ、いい)

ドン、ドンと確実に敵を倒すと通信を繋ぐ

「薰、狙撃手は倒した
早く離れろ」

咲樹はそつと後方から自分のところに繋がってる通路を警戒する

(戦場つて言つても、ここはゲーム内
こつこに回り込んでくる奴は・・・)

「やつぱりな・・・

咲樹の予想通り、通路から残り一人の敵が出てきた

待ち構えてた咲樹はスコープを覗くと相手の胸に狙いを絞り引き金を引いた

銃弾は相手の胸に当たり、敵は力無く倒れ、息を引き取る
そして数秒後、大きな音を発してながら倉庫は爆破された

「例え、ゲーム内の世界でも俺は死ぬかもしれないんだ
生きるために戦ってるんだ」

咲樹はゲームをしてた時と違つて、確實に人を殺した罪悪感を感じ
ながら合流した薰達と共に港を出た

第四発田（後書き）

「うまく書けてる心配しながら投稿します（^-^;」

第五発田（前書き）

殺した自覚と改めて感じたゲーム内でのゲームの違い

第五発目

「ふいー、疲れた」

「ははは、先シャワー使つぞ」

「ああ、わかった」

宿舎の血室ついた咲樹はベッドにダイブしながら薰に手を振り、返事をする

ゲーム内に来てから一週間

咲樹達はこの生活にだいぶ慣れた

最初は銃の扱いにこそ、手こずつたものの今はお手の物だしかし・・・

(俺は人を殺したんだよな
この手で・・・)

咲樹は自分の手のひらを見つめる

銃で殺した時はそこまで実感はなかつたが、一度だけゲリラ戦ミニッシュョンがありナイフを使った時があった

その時はナイフで倒したものの感じた感触は今でも忘れない

相手は死にもの狂い

ピリピリとした殺氣と鋭く光る刃

ストーリーを知つてた咲樹はナイフかわすとグルガナイフを相手の胸に刺す

肉を抉り、刺さった感触

相手の口から血がこぼれ、抜いたグルガを伝つて手に血が伝わる

初めての確実な死と振り掛かる恐怖心に咲樹は思わず、吐いてしまつた

その時は薫の手助けで立ち直れたものの今でも鮮明に思い出せる

(薫がいなかつたら確実に潰れてたな、俺)

親友の存在のありがたみを感じていると薫がシャワー室から出でてきていた

「ほれ、飯用意しどくからシャワー行つてこい」

「サンキュー」

そう礼を言つて、俺はシャワー室に向かつた

咲樹がシャワー室に行くと俺はキッチンに向かう

冷蔵庫にある軍用食をテキパキと手順に従つて作つて行く

「一いちに来て一週間か

薫は冷めた声で呟く

こっちの世界に来た初日

俺たちは銃の試し撃ちなどやるため簡単なものからやることにした

『チームデスマッチ』

ステージはソ連給油用港に停泊している大型貨物船内がステージになっている

最初は銃の操作の仕方の確認などのため、威嚇射撃も兼ねて撃ち、次にある確認のためしばらく二人で行動していた

咲樹が狙撃で俺が近づく敵からの援護銃を撃ちながら、俺は容赦なく敵を撃つ

頭が吹き飛んだり、腹が蜂の巣になつて臓物が吹き飛んだり、クレイモアなど地雷やグレネードの餌食になつて、下半身が吹き飛んだ光景など見ていたがはつきりと殺人を感じたわけではなかつた

すると、その時咲樹が呟いた言葉が蘇る

「やつぱりデスマでも死んだら終わりなんだな
さつきスコープ越しに仲間の死体見たけど消えてない

通信で確認したら生き返ったわけじゃなく新たな『増援』だった

確実に死ぬんだな」

諦めを含んだような呟き

同じ境遇だからこそ、その呟きを薫は感じた

慰めてやろうとしたが、そこで心音センサーに反応があることに気づく

(これは・・・近い!)

狙撃している部屋のドアの前

薫は素早くドアに駆け寄る

ドアが蹴破られたのと同時に薫はナイフを投擲

悲鳴をあげることもできずに絶命した敵の顔面に深々と刺さったナイフを抜くとそのまま後ろの敵に仕掛ける

『殺らなければ殺られる
俺が死ねば咲樹が死ぬ』

死にたくない気持ちと守りたい気持ちがある薫は容赦なくナイフを振るった

ナイフの刃は敵の顔面を切る

刃は顔の眼球を貫き、そのまま横一閃

顔が割れ、倒れた死体の頭部には脳の臓物と血が溢れ、出ていた

グロテスクな光景に吐きそうな感覚をグッと堪える

「・・・・っ！」

咲樹、敵は倒した

「ありがと・・って、大丈夫かよ！？」

顔色、真つ青じゃねえか！」

ドアから出てきた薫の表情に警戒体勢を解いた咲樹は急いで駆け寄る

「大丈夫だ

弾食らったわけじやねえから安心しろって」

「でも……」

頭を軽くポンポンと叩いて薫は笑顔を浮かべて安心させる

「けど、結構キツかつたんだよな～
今は慣れてきたけどよ・・・」

薫は苦笑を浮かべながら皿をテーブルに運ぶ
殺すことには今でも抵抗がある
ナイフを持つ時は尚更だ

けど、生き残るために殺す
戦場ではそれが常識なんだろ?――――――

「あちー

「薰?、飯できた?」

「ん?ああ、できた・・ぞ」

「ん?どした、薰?」

咲樹は黒のTシャツに下着（女物）で頭にタオルを被つてる姿
年頃の男子なら反応しないはずがない

勿論、薫は外見が大人っぽくても中身は健全な男子高校生だ
みるみるうちに顔は赤みを帯びていく

「だあ～、毎度毎度！

服を着ろーーーーーーーー

テメエ、襲うつぞ、咲樹！」

「あ・・・

いや～、長年の癖でつい

咲樹は苦笑を浮かべながらクローゼットから服を出すと脱糞の如く
シャワー室に戻る

「つたぐ、一週間も経つてゐのにまだ女だと自覚してねえのかよ」

手間の掛かる弟？もとい親友に笑みを浮かべる薫だった

番外編1（前書き）

ゲームにインして一日目
新たに発覚した二人の関係と新キャラの登場です！
＼(^_^)／

「「」が軍の宿舎か」

「なんつーか、ビルだな」

二人は左右に自分の武器など荷物の入ったカバンを持ち、目の前の巨大なビルを見上げる

この世界に来てから一回田中
あの日が覚めたテントからすぐに異動命令が出され、一度、軍の宿舎に帰ることになった

ここでは、ミッションの受付や報酬の受領も兼ねてるらしい
とりあえず、二人は中に入った

すると受付の金髪の女の子が笑顔で迎えてくれた

「あ、おかえり！」「一人とも」

「「た、ただいま」」

いきなりの出迎えについていけず、苦笑しながら返事をする
しかし、その反応に不満なのかブクリと可愛らしく頬を膨らます

「いつもみたいに「メアリー、ただいま！」って抱きついて来ない
なんて・・・咲樹、戦場で頭でも打つて幼なじみの私を忘れたの
アレンまで同じような感じだし・・・」

受付の娘・・・メアリーは首を傾げながら一人を見る
そして、原因の二人は同時に思った

(（このキャラの生活なんて知らねえよー））

二人はチラリと互いに目を向けるとサッと後ろをメアリーに背を向ける

「どうすんだ、 薫！？」

「俺、 どんなキャラなんだよ！？」

「落ち着け、 咲樹！」

「俺だって同じように感じてんだよ！
とりあえず、 謝つて・・・」

「謝つて、 その後は？」

「敵のグレネードの衝撃で一人して頭打つたことじょう・・・
さすがに、 中身は異世界の人間です
なんて信じねえだろ・・・」

「だな、 そうしよう

あ、 口調は・・・女らしくじゃないとダメなのか？

「当たり前だろ？」

「くそー。」

「なんで、 キャラコス女にしたんだ！」

互いに、小声で作戦タイム

咲樹は女キャラにした過去の自分に悔しさが募り、殺意が沸いた

すると、「コソコソ話す」人に痺れを切らしたメアリーは軽く怒り気味に訪ねる

「ちょっと二人とも」

いくら一人が恋人同士って言っても幼なじみの目の前であからさまにコソコソ話されるのは感心しないよ？」

（（恋人同士！？））

背を向けているため驚いた表情を見られなかつたが一人の心情は乱れまくつていた

「すまん、メアリー

俺たち昨日、相手グレネードの衝撃で頭打つちまつてな悪い、今日は早めに休みたいんだ
部屋どこだつけ？」

「ごめんね、メアリー

埋め合わせは必ずするから！」

二人は咄嗟の演技でメアリーを誤魔化す

そんな二人の誤魔化しにメアリーは気づくことなく、盛大な溜め息をついて、二人に鍵を投げる

「全く・・・

さつさと休んでそのおかしくなつた頭を治して来てよ」

二人は鍵を受けとり、急ぎ足で鍵の番号ね部屋に向かう

『ガチャ、キー、ドサツ、ボフン!』

ドアを開け、荷物を置き、二人はベットに身を投げる

「なんか・・・疲れた」

「同感・・・」

このキャラは明るい奴みたいたな

「ああ、しかも俺のキャラと恋人だとよ・・・」

互いに盛大な溜め息

いきなり恋人同士だと言われてもすんなり受け入れるはずがなく、二人にはどうしようもなかつた

しかし、周りがそれを受け入れるはずもないことがわかつている二人は・・・

「とりあえず、メアリーの前では恋人を演じなきゃなんないぞ」

「わかつてゐる・・・疲れるよな、女の振りとか

「諦める・・・」

「親友の苦労を容赦なく切り捨てやがつて」

「俺にはどうしようもねーよ

女キャラコス、選んだ過去の自分を恨むんだな」

「過去の自分、殺してー！」

咲樹は怒りを枕にぶつけながら悔やみ、薰は内心で男キャラを選んだ過去の自分を誓めていた

その日の夜、シャワーを浴びている咲樹を待ってる薰はベッドに横になりながら一人悩んでいた

（恋人かあ・・・

今まで誰かと付き合つたことないんだよな・・・）

今まで誰かに告白されたことがあるが自分の好みの相手ではなく、こじごじく振つて来ているのである

（なんつーか、気の許せる相手でロングヘアの女がいいんだよな・・・
・）

そんなことを考へているとフツと今の親友が思い浮かぶが・・・

（なんで咲樹が思い浮かぶんだよ！

俺はホモか！ アイツは男の親友だぞ！
けど、今は女・・・）

「うじやねえよー。」

薰は頭を抱えながら飛び起きる
すると、田の前には親友が立っていた

「ビックリしたな～・。
いきなり大声出すなよ」

咲樹はそう言つと自分のバックを開け、ゴソゴソと中身を漁る
薰は数秒固まり、咲樹の姿を見て、口をパクパクさせた

「お・・おまつ、その格好／＼／＼／＼

「んつ？
ああ、下着持つてくの忘れてたから取りに来たんだ
別にいつも風呂上がりはこんなんだろ？」

確かに咲樹の家に泊まりに行つてる時、咲樹は上半身裸でうつりく
癖があるが、それは男の場合の話である

薰から見た今の咲樹には
サクランボ付きのメロンのような肉まんみたいなアレ
風呂上がりのため濡れてる金髪の髪と赤くなつた顔が色っぽく見
えている

男の薰にとつて心臓驚きの光景だ

「お前は今は女だらうが！
わざわざシャワー室で服来てこい！／＼／＼／＼

「あ・・・そうだった」

咲樹はバツク^一と持つて、シャワー室に向かう
それを確認すると薫はぐっと拳を握る

「よく耐えた、俺の理性！」

薫はそう自分を褒め称える

こうして夜は更けていくがこれから何日間は、咲樹が再び薫の理性
をガリガリ削るとはまだ知らない

第六発目（前書き）

戦時中に二人の任務とは . . .

第六発目

「ふあ～、ねむ・・・」

ベッドからもぞもぞと這い出た咲樹は着替えを持って洗面所に向かう
「中々、慣れないな・・・
いや、慣れたくない」

そう呟きながら文物である軍服を着ていき、母親がしていた化粧の
やり方の記憶を頼りにわかる範囲でしていく

一度、化粧などしないで行つたらすっかり仲良なつたメアリーに怒
鳴られてしまい、咲樹は嫌々、渋々、荷物に入つてた化粧品を手に
した

「あとは、これつけてっと・・・」

階級を示すマークと名前、軍名が入つたバッヂを付ける

コーラシア合衆国軍
特殊部隊所属
サキ=ミーシリア中尉

ここでの世界の説明を付け加えよう
この世界は大まかに四つの勢力に別れている

ヨーロッパ大陸とアフリカ大陸が合わさったコーラシア連邦軍
アメリカ大陸と南アメリカ大陸が合わさったアメリカ連合軍

ロシア大陸と北朝鮮の北ロシア軍

北朝鮮とロシアを除いたアジア国とオーストラリアのアジア連盟軍である

今は世界中が戦争に包まれているが、その原因是北朝鮮とロシアの宣戦布告である

核ミサイルの韓国、中国国境付近への発射

国境付近の自国の民間人もある

これにより、韓国と中国はほとんど機能が停止し、すぐに第三射が日本に撃たれた

沖縄の軍が迎撃すると思いきや、アメリカ軍は迎撃空域に間に合わず、待機していた日本自衛隊空軍の迎撃により被害は中国地方沿岸部のみで抑えれどもものの迎撃した自衛隊は全滅

沿岸部の津波により、自然災害にも繋がった

これを期に、日本政府はアメリカ沖縄基地の撤去と条約の撤廃を決意アメリカとの関係を断ち切る

そして自衛隊を派遣し、中国、韓国に支援を送り、同盟を結ぶ

そして、ヨーロッパは警戒態勢で待機する

ソ連は核ミサイルをアメリカ、ドイツに一発ずつ発射したが両国はすぐに対応した

これから世界中が戦火に包まれた

そして現在、圧倒的物量の北ロシアとアメリカ連合軍が圧勝すると思いきや、両軍に挟まれながらも生き残っているアジア連盟は、韓国やオーストラリア、日本のによる技術力によって最新兵器を開発した

ヨーロッパも各国が同盟を結び、戦力を集結させたコーラシア連邦軍中でもドイツ軍が先頭に立つて、指揮をし、戦力の増加に貢献して

いたのは第一次世界大戦の汚名返上だらう
ドイツは優秀な戦術でソ連にとつて強固な国境沿いの壁になつてい
るのだ

サキと薰が所属しているのはユーラシア連邦軍の中でも特殊部隊
エース部隊だ

だからこそ、この戦時に前線に出ることとなるため・・・

ガチャリ

「お、起きたか咲樹」

「おはよー、薰

どこに行つてたの？」

「おはよっさん

お前が熟睡している間に召集掛かつてな
ライデン隊長からの任務が掛かつたな、今すぐに荷物まとめるぞ」

「今すぐ!? 任務内容は?」

「聞いて驚け、新婚旅行だ」

「ハア!?」

薰の悪戯っぽい笑みに咲樹は眠気も吹っ飛び、言われた通りに驚き

の声を挙げた

第七発田（前書き）

新婚旅行の内容は・・・

第七発目

「それじゃあ、くれぐれも気をつけてくれ
生きて帰つてこい、健闘を祈る」

「「」解…」」

咲樹と薫はこの世界で初めて出会ったむさ苦しいヒゲオヤジ…。
もといライデン隊長に敬礼をして電車に乗り込んだ

薫はグレーのシャツに黒のジャケットとサングラスにジーンズ
咲樹は薄赤いノースリープのワンピースに黄緑色の上着に麦わら帽子
片手に荷物を持ちながら、もう片方は腕を組んでいる

端から見れば絵になる新婚夫婦で今から新婚旅行をしてる最中だと
思うだろ？

しかし、実際は…

「はあ～、なんで任務で女装しないといけないんだよ

「女装じゃなくて正装だろ…」

それに潜入任務か…。
ゲームではなかつたミッションだな…。

「しかもよりもよつて日本だぜ？」

「どうこう偶然だよ

「それは同感だな・・・
けどまあ、日本の技術を見て来いって任務だ
金もかなり貰ってる
気軽に行こうぜ？」

「はあ～、わかつたよ」

咲樹はため息を吐くと薫が笑顔で肩に腕を回す

「俺たちは新婚夫婦をだぜ?
笑顔だ、マイハイー」

「・・・ええ、そうだつたわね
アナタ」

薫の一言に若干ひきつらせながらも笑顔で答える咲樹
しかし、すぐに小声で低く呟く

「テメエ、帰つたら覚えとけよ・・・」

「はつ、帰つたらやり返せないくらいに弄つてやるよ」

咲樹の一言に薫は挑戦的な言葉で返した

第八発目（前書き）

新たな現実に二人は絶句
今回は若干、薰視点

第八発目

基地を出てからかれこれ二十時間……咲樹と薫はやつと東京の成田空港に到着した

「疲れた」

ずっと座りっぱなしも体に悪いな

咲樹は大きく伸びをしながら空港の改札口を通り

その手にはローラー付きのバックだけで武器など入ったバックは持っていない

そのバックの行方はといふと……

「咲樹！自分の荷物を人に押しつけんな！」

薫はいかにも重い（武器一式が入っている）バックを掲げるが咲樹は余裕の笑みを浮かべて、返事をする

「あら？ 大事な愛しい奥さんに重い荷物を持たせるの？」

「・・・こんな時だけ女面しやがって」

「何か言つた、アナタ？（勝つたな）」

「何でもないよ（この借り、後で必ず返す！）」

ラブラブ夫婦が互いに極上スマイル
だが、内心では咲樹は勝者の笑み

薫は敗者の悔しさを感じていた

空港を出てからお金を日本円に変え、レンタカーを借りた二人はそのまま市街をぐるりと回る

「戦時中だって言つのにあんま変わんないな」

「ああ、少し人が減つたくらいだな」

東京の市街の人ばかりは前いた世界と変わらず道は歩く人間に埋もれ、タクシーや車は渋滞に見回っていた

「あ、俺たちの家どうなってるかな？」

「ないかも知れないが行つてみるか」

咲樹の提案に薫はハンドルを池袋方面に向けた

しばらくして着いた家の場所に一人は目を疑つた

見た目、表札

どれも自分たちがいた世界と同じ光景だった

すると咲樹の家のドアがガチャリと開いた

「あら?

「ここにちは、ここはまだ準備中よ?」

「母さ「すいませんでした

実は新婚旅行で日本に来てたんですね

俺たちは昔、ここの辺に住んでまして懐かしく思いながら街を回つてたところなんです」

薰は慌てて咲樹を胸に抱き寄せながら、笑顔で咲樹の母に説明する

「あら、新婚さんなのね

いいわね

私の息子も早く大きくなつていよい嫁さんを連れて来てくれないか

しら

咲樹の母の言葉に一人は絶句した
息子といつ言葉に・・・

「あの昔、ここに何度か来たことがあるんですが、もしかして息子さんの名前は・・・咲樹君でしょうか?」

薰は胸元に抱き寄せた咲樹が微かに震えているのを感じながら恐る恐る聞く

声が震えないように必死に堪えながら・・・

「あら、そうなの?」

確かに息子は咲樹よ・・・

ほら、ちょうど良かつたわ

あの背の小さい方が咲樹よ

「 「え・・・？」」

薫の家から出てきた制服を来た一人の男子を目にした時、一人は絶望に陥つた感覚を味わつた

そこには『自分』がいたのだ

「 薫・・・俺・・」

「 えつ・・・おい！？」

咲樹は微かにそう呟くと薫の腕の中で氣を失つ

「あら、大丈夫なの！？」

「あ、はい

こいつ今、女性のアレとして
今からホテルに行くので大丈夫です
ご心配なく

それでは、また縁があれば・・・」

薫はとつさに思い付いた嘘で挨拶をし、車に乗り込み、アクセルを踏む

「とつさに思い付いた自分よ、よくやつた！」

と自分を誉めつつ、薫は急いでぐつすり休めるホテルを探した

第九発目（前書き）

最近、忙しくてまともに書けてるか不安です・・・

第九発目

東京の街中で見つけた結構高い高級ホテルに着いた薫は背中に一人分の荷物を背負い、お姫様抱っこで咲樹を部屋まで運ぶと荷物を放り捨て、咲樹と共にベッドに倒れ込む

「まるでドッペルゲンガーだな・・・

いや、俺は今、『別人』か

咲樹も・・・」

住む場所、家族、友人、そして薫と咲樹としての『存在』それら全てを奪われたかのように感じた

自分を見た時は吐きそうになつたが咲樹が気を失つたため、すぐに収まつた

自分を知つてるのは咲樹だけ

そう思うと咲樹の存在がとても大切に感じた

「咲樹だけは絶対失つてたまるか・・・

家族や自分を失つても咲樹だけは失わねえ

戦場で近づく敵はもう容赦はしない」

自分に言い聞かせるように呟くと隣に寝ている咲樹を胸に抱き寄せ、意識を深い眠りに落とした

「じゃあ、また明日な」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

夜遅くまでオンラインゲームをやっていた咲樹は薫と玄関で別れる
と家の戸を開く

「ただいま～」

いつも通りに靴を脱いだが、母の一言に固まつた

「あの、どちら様でしうつか?
あら、もしかして咲樹の彼女さん?
可愛い娘ね～、外人さんかしら?」

「えつ？」

田の前で嬉しそうに喜ぶ母に咲樹は玄関の鏡に田を向ける

輝くような金髪にフランス人ハーフのように整った顔立ち
キュッとしまつたお腹にスラリと伸びている色白の足

女の象徴とも言えるふくべりとした大きな胸

「私は、だ・・れ?」

(私?)

咲樹は背中に嫌な汗を流しながら、自分の声に疑問を浮かべる

「あれ？母さん、お密さん？」

そう言いながら出でたのは・・・自分自身だった

「あら、咲樹

あなた、いつの間にこんな可愛い彼女さん作ったのよ」

「何言つてんだよ、母さん
俺、彼女いなけど？」

「じゃあ、お知り合いさん？」

「ん~、誰だつけ？」

そのやり取りにだんだん足元から闇に取り込まれて行く

まるで自分の存在がなくなつていいくかのように・・・

そして男の自分が目を大きくし、自分に近づく

「思い出した・・・」

「やめろ・・・」

近づく自分がまるで死神に見える・・・

咲樹はその先の言葉を聞きたくなかった

逃げようとしたアを開けようとしたが、なぜか開かなかつた

「ダメよー、ちやんと現実を受け止めなくちゃ」

「うわあーーー！」

こつ之間にいたのだらつ・・・

自分の母親が背後から抱きつき逃がさないようにガツチリ腕を回す

「わうわう、あんたは」

「やめてくれ・・・頼む
言わないでくれ・・・」

「アハハ、ダメだよ」

必死に懇願するも男の自分は笑いながら拒否し、耳元で死刑宣告の
よつに囁いた

「やめりおおーーー！」

「！」はあんたの居場所はじやないぜ？

女の子のサキちゃん

認めたくない言葉が脳内を支配し、目の前が暗くなる

（俺は・・・俺は咲樹だ！
サキじゃない・・・）

「・・・や！」

涙を流したくなる感覚を抑え、認めたくないことの最後の抵抗のように頃垂れると誰かの声が聞こえてくる

「・・・せ、それ」

この声は・・・

「起きる、バカ咲樹！
起きねえと、犯すぞ！」

「つじえ！？」

頭に強烈な痛みが走ると咲樹は跳ね起きて、頭を抑える

「テメエ、何し・・・「悪夢でも見たか？」

薰の一言に咲樹の表情は段々と怒りから悲しみに変わっていく

「俺・・・自分の存在がなくなつて・・・もう元の世界に戻れない
つて、わかつても・・・認めたくないて」

「わかった、わかったから
我慢しないで、泣いちまえって」

「う・・ぐ、ひぐつ」

男の時の名残なのだろう
咲樹は声を押し殺しながら静かに泣き、薰もそんな咲樹につられ、
涙を少し溢した・・・

第十発田（前書き）

仕事の多忙さに更新が遅くなりました
もう心身共に疲れきっています

ほんとすみません・・・

次回は戦闘の話がメインです

第十発目

「ん~、寝ちゃったのか」

咲樹は小さく欠伸をしながらパチリと目が覚める
視界が暗いのは電気がついていないのだろう
明かりをつけようとベッドから起きようとしたが身動きが取れなか
つた

「あれ？ もしかして薰？」

だんだん目が慣れて来たのか目の前にはつづらと薰の顔があり横
に顔を動かせば白いたくましい腕

つまり抱きしめられてることに今更ながら気づくのであった

「ちょ、俺、何もしてないよな？ されてないよな？」

身体を確認するが服は乱れていないことに安心し、落ち着きを取り
戻す

「薰・・・薰がいてくれなかつたら俺、潰れてたな
ゲームの世界に来て、女になつて、あげくに家族は違う世界の人間
つて改めて思つても奪われたと感じまつ・・・
ついでに、人殺しまでやる職業だ
一人だつたら確実に死んでるよ」

何度も大切だと感じたが今回のこと改めて一層強く大切さに気が
ついた

同時にいつも助けてくれる親友を今度は自分が助けてあげたいと思うのだ

(何ができるんだろう?)

そんなことを薫の腕の中で頭を悩ませていると突如、大きな爆発音が聞こえた

「なんだ!?」

咲樹は薫の腕から逃れると窓から外を見る

見れば高層ビルから所々、煙が立ち上り、周辺からも砂煙が上がっていた

「よく見えない・・・
そうだ!」

咲樹はバックを開けると次々と機器を組み立てていく

「安全装置は着けておこう・・・」

構えたのは迷彩が入った長い銃身であるTRG
スコープを覗き、高層ビル周辺を見た

「これは・・・テロ!?」

スコープ越しに見えたのは銃を発砲している外国人だつた

「自衛隊は何をやつてるんだ！
一般人を撃つてるんだぞ！？」

・・・・・

サイレンサーはあつたはず・・・

咲樹はサイレンサーの確認をすると再び組み立てたTRGをすぐに組み立てれる程度に解体しバックに入れるとドアに向かおうとするしかし

「どこに行くんだ、咲樹」

「つー？」

「いつから・・・」

咲樹が振り向けば薫がベッドに起き上がつてゐる形でこちらを見ていた

「お前がベッドから出たくらいだよ
気づいたら咲樹はスナ構えてるし、急にそれ持つて外に行こうとする何があつた？」

そう聞く薫に咲樹をバックにしまつたTRGを組み立て薫に渡した

「その窓から煙をあげてるビル周辺を見てみろ」

「・・・」

薫は黙つて咲樹からそれを受け取り、窓からスコープを覗く

そしてその光景に薫は息を呑みながら咲樹の行動が何をしようとしたか理解した

咲樹にスナを渡すと薫はフウーと一息つく

「お前はそのスナであるテロに介入しようとしたのか？
バカか、お前は？」

自衛隊でも日本警察でもない
ましてや、国籍はヨーロッパの軍人だ
もし日本やテロの国の軍事関係者にバレてみる
この世界だと一発で戦争関係だぜ？」

「だけど…・・・・！」

咲樹はその先の言葉が出てこなかつた

薫の言つた言葉の意味を考えると何も言えなくなる

しかし、田の前で無抵抗な人間が撃たれているのを咲樹は我慢できなかつた

すると急にある文を思い出した

「ロシアによる東京サンシャインホテル強襲テロ

そのテロに紛れて東京湾から潜水艦による爆撃と上陸により、日本の東京は混乱に陥り、同時に天皇陛下の人質により、ロシアは日本の高度な科学軍事技術の奪取に成功・・・・で確かヨーロッパが苦戦することになるんじやなかつたか？」

咲樹のその説明はストーリーモードでのチャプター文章の言葉だった

「それは・・・」

「俺たち一人が今ここで食い止めれば日本が落ちないヨーロッパが苦戦しない未来を知ってるからやれるんじゃないの?」

「・・・自ら人を殺すことになるんだぞ? 後悔はしないか?」

薫は最後の警告の通り一層強く、低く問う

咲樹はそんな薫に怯えることなく答えた

「俺は『あの』母さんの子供じゃないけど、違う咲樹の親でも父さんや母さんが暮らす東京が墮ちるのをわかつていながら見逃すのは嫌だそれに・・・苦戦つてことは全線に出る薫は危なくなるかもしれない・・・

薫を失いたくないから今やるんだ

文句あるかよ」

逆に睨み返してくる咲樹に薫は先ほどの表情から一変し、笑みを浮かべながら立ち上がる

「つたぐ、お前は昔つから頑固だからな
答えはわかってるさ
だが、戦力は俺たちだけ

危なくなつたらすぐには退くぞ』

「だな

薰は覚えてる?

『芋野郎はチキン野郎』その先は?』

咲樹の悪戯っぽい笑みを浮かべながらの問いに薰は、一瞬驚きの表情を浮かべる咲樹と同じような笑みで答える

「『攻めるが勝ち
倒してナンボ』」

「『逃げるなら爆弾大量設置
特攻クラン』」

『『B・RUCH』』

懐かしいセリフを言い終わるとコシンと拳をぶつけ合つ

「これ言つたからには勝つぞ』

「ああ、上等!』

気合い十分の一人は最低限の荷物を持って部屋を出た

「裏口に5、正面7

周りは警察、自衛隊が囲つてゐる
どう攻める?」

偵察から帰つてきた薫はスコープを覗いてる咲樹にそう伝える

今現在、一人はサンシャインホテルから500m離れた中型ビルで
待機と作戦を練つていた

テロの影響により周囲は廃墟と化してゐた

「やっぱり裏口からの特攻じゃない?」

自衛隊とかそつちは楽勝だと思つて、やっぱり警察とか正面に意識
が向いてるんじゃない?」

「だな、フラッシュ、スモークいくつ持つて来てるんだ?」

「フラッシュ1、スモーク3かな、薫は?」

「フラッシュ3、スモーク2だ」

机の上に互いの手持ちを出し、装備の確認をする

「クレイモアは・・・一人合わせて4つか
まあ、罠はこんなもんでいいだろ
さて、どうしたものか」

薫は腕を組みながら考へ込むが咲樹が窓を見ながら呟く

「ソックロー、特攻の方がいいんじゃないかな?
ビル内に入れればこっちのもんだ

さつきテレビからの実況聞いてたけど、リーダー各は最上階の大型
ホテルでホテルの従業員や客を盾にして取り引きを要求してゐるらしい
たぶん、ストーリー通りなら時間稼ぎなんだと思つ
なら、その時間稼ぎを使わせてもらおう

冷静な落ち着いた口調で呟く咲樹に薫は驚きを隠せなかつた

「どうした?

いつになく冷静だがどした?」

「いや、わかんない

けど凄く冷静でいられるんだ

緊張はしてるけど、なぜか物事をよく考えれる

咲樹は表情は無表情だがその瞳は強い光が灯つており、それを感じ
た薫はアサルトライフルとサブの拳銃の安全装置を外し、荷物をま
とめ始める

「なら、お前がその冷静さを掴んでいるうちに殴り込み行くぞ
失敗はできない作戦だからな」

「ああ、必ず成功させる」

第十一発目（前書き）

所々、はしょりました・・・
精神が持ちません
すいませんでした

とりあえず戦闘
薫のほうが活躍してるかな？

第十一発目

「 3・2・・」

『バス！ プススス！ バス！』

サイレンサーの音が一人にしか聞こえない程度しか出さず、正確に頭を捉え、静かに計五人の命を奪う

「先行する」

薫が静かに走りながら突撃し、その後ろで咲樹が周囲、後方警戒しながら薫についていく

ホテルに侵入し、一回ロビーが見える廊下の入り口で薫が手信号を送っていた

『敵を発見、数2』

咲樹はすばやく薫に近寄り、薫の指差す方向を見る

ロビーに続く少々長めの廊下

見ればロビーの方から開けるドアの後ろに一人が隠れながらロビーを見ていた

おそらくロビーで何かしら動きがあつた場合の連絡係と言つたところだろう

「倒せるか？」

上に続く階段がちょうど廊下の真ん中だ
奴らがこっちを見たらそれでアウトだ
さすがにこの距離

ゲームじゃないんだ

俺には無理だ

咲樹はチラリと目標を見る

その間、約30メートル

バレる前に倒す

「・・・最低でも5秒以内だな」

咲樹は手を胸に当てる

心臓は破裂しそうなほど高鳴り、極度の緊張を促す

一度大きく深呼吸する

「やるよ」

咲樹は一度立ち上ると一瞬だけスコープを覗きながら標的を確認

再びスコープを覗く

(せーの・・・)

右にしゃがみながら身体」と廊下に出て引き金を引く
そして一人目の頭を撃ち抜く

(次つづけ)

反動を無理やり身体全体で受け止め、すぐに再び狙撃体制へ

見れば敵は味方が打たれたことに気づいたところだつた

どこから?

ロビーから?

いつ襲撃に?

まさか後ろから?

そんなことを考え、後ろを振り向くとする敵兵士

しかしその時点で『思考が止まっていた』

咲樹はすでに銃弾を敵の側頭部に打ち込んでいた

膝から倒れ、こちらを振り向くまえに思考を奪つていた

「ナイショッ、大丈夫か?」

「はは、スナの早打ちなんてするもんじゃないな」

乾いた声で笑みを浮かべる咲樹に薫はポンポンと頭を撫でてやると
周囲を警戒しながら再び先行する

一人はその後、順調に階を進め、15階にたどり着いたところで歩みを止めた

「さて、ここが最上階だな」

「1階以外、敵に会わなかつたのが不思議なくらいだつたけど」

「そりや、表の警察がいまだに動きがないからだろう
屋上や地下から侵入しようにも必ず待ち伏せされている
それに咲樹みたいなスナイパー普通にいねえよ
咲樹がいるここまで来れたんだよ」

「つつ！／＼／＼／＼

あ、ありがとつ／＼／＼／＼

「はは、顔真っ赤

結構、可愛いぜ？」

「なつ…？つるさこ／＼／＼／＼
このオープنسケベ！」

毎回、毎回犯す発言しやがつて

「なつ！？」

それはお前が無防備だからだろ！」

「知るか！」

「口、スケベ、変態、童貞！」

「・・・テメエ、最後の言葉は聞き捨てならねえな」

「なんだよ、ほんとのことだろー。」

「咲樹も同じだらうが！」

いや、今は処女か」

「・・・帰つたら覚えとけよ、後悔させてやる」

「ハハハ、やれるもんならやつてみる
でも・・・」

「ああ・・・こっちが先だな」

薫と咲樹は表情を変えてドアを見て、ガチャリとライフルのレバー
を引く

「フラッシュユ行くよー！」

「OKー！」

ドアを開けカラーン、カラーンといつの音を立てながら室内に音が鳴る
感高い音と強烈な光が部屋中に広がり、中の人は身動きがとれなく
なる

部屋は大きなホールになつており、敵は計12人

人質の回りに5

窓側に2

ドアに1

「こんな配置である

薰はドアの敵の頭部に容赦なくナイフで喉を食い込ませ、そのまま人質回りの敵に向かう

タンツ、タ、タ、タンツ、タンツ

トリズムよく撃ちわけながら相手の頭部を正確に撃ち抜いていく

咲樹は入った瞬間、敵を確認
焦らず行動

まず、部屋隅を撃ち抜く

部屋の隅はフラッシュから一番遠い
回復が早い敵から倒して行く

「 薰！」

「ああ、来い！」

薰は人質の回りにホールのテーブルを倒し、即席のバリケードを作る

咲樹はそのバリケードの裏に飛び込み、リロード

そして次の瞬間、バリケードに弾丸の雨が降り注ぐ

「薰、援護！」

咲樹の言葉に薰は敵の方向にバリケードから銃だけを出し、乱射する咲樹はバリケードの小さな隙間から銃口を出し、スコープをすぐに覗けるように狙撃体勢に

薰の乱射が終わり、敵の一人が物陰から頭を出した瞬間

咲樹はスコープを覗いて微調整

敵が身体を出して、銃を構えた時にはすでに引き金を引いていた

何の音もせずに、敵は吹き飛ばされ、胸を抑えながら命が途絶えた

「おい！？」

発砲音しなかつたぞ！

クソが！」

味方が何の音もせずに殺られたことに動搖し、思わず声を上げ、死体を見る

しかしその動作が命取りになつた

ザシュー！

ほんの数秒で敵の目の前に迫つた薰が敵の喉元に長いグルガナイフの刃を刺し、瞬時に抜かれると頭をハンドガンで撃ち抜かれる

男は死んだことに気づく暇なく息絶える

「咲樹！人質の縄をほどいたらさつさと退くぞ！
下の掃除をしてくる！」

「ああ！

わかつた、すぐに行く！」

咲樹は階段を降りて行く薫に返事を返すと人質の中の代表っぽい人の縄を切って行く

「あなたがここのおテルの支配人ですか？」

「はい、助けていただきほんとうにありがとうございますー。」

「礼はいいです

あなたはここから何かしら外に連絡を取り、救助を待つて下さい
あと、救助は必ず30分後でお願いします

今から他のテロリストを掃除します

それはその時間です

いいですね、30分後です」

「えつ！？」

ええ、わかりました！」

咲樹はその返事を頼りに階段を降りていく

銃声の音を頼りに階段を降りていく

すると下から多くの足音が聞こえた

隙間から覗けば銃を構えて走って登つてるテロリスト達だった

おやりへ駆せに氣づいたのだろう

咲樹は階段の隙間から見えるテロリストに狙いをつけ、引き金を引く

上から首筋を撃ち抜き、倒れたテロリスト

それに気づいた仲間が銃を階段の隙間から乱射していく

だが咲樹は身を引かず隙間から再び狙いを定める

頬と手を銃弾が掠めるが我慢

そして乱射してる銃を持つ手を撃ち抜く
悲鳴を上げながらアサルトライフルを落としたのを確認すると咲樹
は薫がいると予想した買い階のドアをあける

「つー？」

「咲樹！伏せろ！」

薫の叫び声にすぐに膝を曲げ、腰を落とし、後ろを見る

それと同時にAK-47の高い銃声が響き、一人のテロリストが崩
れ倒れる

それと同時に咲樹は携帯型のバックからクレイモア（簡易型地雷）
を階段のドア付近に設置する

そしてしばらくして勢いよくドアが開く

それと同時に電子音が響き、クレイモアが起動する

「グレネード！」

クレイモアに掛かり、最初のテロリストが吹き飛び、後列のテロリ

スト達が体制を崩したところにグレネード爆弾をブチ込む

クレイモアより一層勢いのある爆発音が響き、ドアから血が勢いよく飛んでくる

「先行する」

薰は僅かに砂煙が上がっている階段に走り、銃を構える

「・・・今、楽にしてやる」

眩きとともに銃を乱射

グレネードの空爆により即死じやなかつたテロリストはその銃弾により、息絶える

「ずいぶん固まつてたんだな・・・」

「一気に俺たちが居た階に雪崩れ込むつもりだつたんだろ」

階段は酷い惨状だった

階段は粉々に砕け、床、天井、壁は肉片や血糊、内臓や骨片が飛び散っていた

上半身だけが残つてる死体や顔が潰れてる死体もある

「・・・反対側の階段にも敵がいるだろ?」

「ああ、そっちも片付けないとな」

まずはすでに敵が階に侵入していないか確認

「クリア・・・」

咲樹の言葉を聞いた薫は慎重にドアに向かう

クレイモアはまだ作動していない

銃口を出しながらそつとドアを開ける

『ガチャ』

銃のレバーを引く特徴的な音

そしてここ数ヶ月で身に付いた戦場の勘とゲームの時にトップクラスまで登り詰めた経験が心の中で警告音を鳴らせる

そしてすぐに出来たとしていた身体を引き戻す

『ダダダダダッ！』

開けたドアが銃弾により蜂の巣になる

「あつぶね～・・・

咲樹、フラッシュを使いつから俺が出たら上の階段に行って狙撃できる奴を倒してくれ

「わかった

『気を付けろよ？』

「ああ、わかつてゐる

そつとて薫は歯でピンを抜き、2秒だけフラッシュショウを持つ

基本的にグレネードやフラッシュショウ、コンカッシュョンは3秒や2秒後に爆発するようになつてゐる

そして薫は3秒目にフラッシュショウを階段に軽く放り投げる

動物は目の前・・・視界の前方に急に出た物に必ず目線が動いてしまつようになつてゐる

薫はその見た瞬間にフラッシュショウが爆発するよつに投げたのだ

フラッシュショウを避けさせる暇を『えぬよつにだ

強烈な閃光が止んだのと同時に薫は階段に走り込む

しかし最前列の敵はフラッシュショウを食らひながらも銃を乱射していた
胸に銃弾が当たるが最前列の歩兵が身につける防弾チョッキだ
衝撃だけで済む

腕を貫通するが利き手じゃないから問題なし

「つおおー」

AKを連射しながら次々と敵を倒していく

しかし、フラッシュショウから回復した敵が応戦

左右にステップしながら敵の標準をずらし、銃弾を避けながらも反撃

「グハツ！」

「なんつ！？」

素早く一人の敵が薫の視界から崩れ落ちる

「ナイズショツ、咲樹！」

心強い援護に薫は敵を蹴散らす

力チツと弾が切れた合図がなる
しかし相手とは戦闘中

薫はAKからM4A1に切り替える

破壊力は落ちるもの高い命中率で頭部や首を撃ち抜いていく

防弾チョッキや足や手には多くの銃弾の傷痕があるが残り三人

薫は止まらなかつた

M4の弾が切れたところで小型の携帯型トマホークを投げつける

深々と刺さった胸にさつた一人

残り一人にナイフを持って迫る

しかし敵は距離を取る

だがしかし・・・

「逃げるなよ、チキン野郎」

咲樹が咳くのと同時に一人が吹き飛び、間をおいて頭を撃ち抜かれた敵がバタリと絶命する

約10人ほど・・・

最上階とクレイモアのをあわせて30人弱

負傷を負いながらも咲樹と薫は生き抜いた

「悪い、肩かしてくれ

もうボロボロだ」

「はは、お疲れ様」

咲樹は笑顔で薫の腕を肩に回すとゆっくり階段を降りていく

その後、一応周囲を警戒しながらも一人はホテルを脱出

咲樹は自分たちの傷口を軽く止血をするとそのままタクシーを捕まえ部屋をとつているホテルに向かう

「おい、薫
寝るなー！重い！」

タクシーの中で咲樹に持たれながら寝る薫

咲樹の苦労は知らずに規則正しい寝息を立てる相棒に咲樹は諦め、

膝を貸してやる

(良い匂いだな、咲樹)

薰に意識があるとは知らずに

第一回 発田（前書き）

やつと更新・・・

今日は咲樹主です

第一二発目

「任務」苦労

そして報告なしの戦闘介入行動をしつかり説明してもらおか
アレン大尉にサキ中尉

「薰、任せた」

「逃がすか、お前も道連れだ」

日本から帰国した一人が待っていたのは、
頭にマークつけた二コニコライデン隊長に連れさられるといつ仕
打ちだった

あのテロ事件から一週間後

日本自衛隊は警戒体制を取るようになりアジア連盟はアジア国に対
して臨戦体制を・・・

今まで緊張状態だった四つの勢力がついに動いた

それによりコーラシア連邦のドイツ軍に並ぶ戦力であるコーラシア
合衆国軍も慌ただしく動いていた

ライデン隊長の執務室にて

「今回、お前達二人が戦闘介入したのはロシア人のテロ行為だった
そこでわかつたことだがその一日後に海上からの戦闘があつた
潜水艦や大型駆逐艦などの大規模な戦闘だ
結果はやはり強固な防衛力のある日本の勝利だつたが日本は大分、
戦力を消費しちだらう

そしてこのような大規模戦闘はさらに起きる

今から五時間、ドイツ軍はロシア国境沿いに進撃を始める
ドイツ軍を中心に、イギリス、フランスも続くようだ

そして俺たちにも任務だ

戦い氣溢れるお前ら一人には悪いが俺たち特殊部隊は前線ではなく
極秘任務が与えられている

今から一時間後にミーティングで説明するが、簡単に言えば『暗殺

”暗殺”・・・

それはこの世界に来て、初めて体験する任務であった

北朝鮮のとある海岸にて

「こちらです！急いで！」

北朝鮮人の身分の低い人間は社会国家なため毎日が生き残りの戦い
だった

それを知っているコーザン連邦は北朝鮮人の身分の低い人間を極
秘裏に身分の保証と共に買収し、工作員として仕立てた

今回の作戦のために

作戦内容は街のある高級レストランにて北朝鮮の外務省とロシア人
の外務省の食事会がある

そしてターゲットはロシアの外務省

シュベン＝マルファーニ

彼はロシア軍が補給してゐる武器商人との取引をしており、彼を抑え
ればしばらくは武器商人とのやり取りはなくなり、ドイツ軍の進撃
状況にも彼の暗殺の成功失敗は大きく関わるだろうと・・・・

海上の北朝鮮軍の目を搔い潜り上陸した特殊部隊は工作員が用意した車に乗り、繁華街に出る

時間帯や工作員の手によってターゲットの店付近は人通りはかなり減っていた

ライデンは素早く指示を飛ばす

「四五にて突入する
各員所定の位置に行け
狙撃部隊は反対側ホテルから援護を・・・
いいな、サキ中尉だけは守れ
そしてサキ中尉

お前の腕に期待している

「了解・・・」

サキは冷や汗をかきながら心臓は破裂しそうなほど緊張していた

そんな咲樹に薫はなんとか緊張を取ろうと声をかける

「まあ、あれだ

今回の任務、爆破ミッションであったチャイナタウンの地形とかなり似てるんだ

そうガチガチになるなって

「俺、仕留めれるかな・・・」

「なら、ずっとスコープ覗いとけって
俺たちがそつちに誘導するからさ」

「・・・Dイーグルだ

お前のハンドガン、ベレッタだろ
弾数はこっちのほうが少ないが威力はかなり高い
貸してやるから必ず生き残れよ

大切な人を失う怖さ

それを咲樹も薰も互いにわかってる
だから咲樹の心配は薰もわかつていた

「おう、サンキュー」

そう言つて薰は背を向けて行く姿に咲樹は生きて帰つてることを
祈るしかなかつた

突撃予定時間まであとわずか

咲樹は愛銃の安全装置を外し、目標のジルの屋上にいた

しばらく経つと無線から突入の合図が送られる

咲樹はあらかじめそのビルの屋上にいることでヘリを使って逃げる
ところを狙撃

本来ならば普通、もつと離れた位置から狙撃するはずなのだが成功

率を高めるため、目標のビルなのだ

そしてビルの下から爆発音が響く

本格的に突入が始まった

無線に集中しながらスコープを構える

まだか、まだかと待つ時間は長く感じるほどだった

（外さない・・・

絶対に外さない

ボディーガードやら何かいても外さない

確実に”殺す”）

・・・タタタツ

複数の足音が屋上へ続く足音が響く

屋上にある鉄骨などの物影からスッと銃口を出す

咲樹自体荷物に隠れており、時間は夜

咲樹の姿はほぼ見えない状態だった

そして三人ほどのボディーガードと共に出てきたのは一人の男性だ
つた

スコープの標準は銀髪の男性の頭部に合わせる

胴や胸は防弾チョッキなどされたる可能性があるためだ

へりを待っているのかターゲットの足が止まり、ボディーガードの注意も階段に向いている

咲樹は大きく息を吸うと少し吐き、息を止める

引き金を引き、屋上には大きな轟音が響いた

(ターゲット、暗殺完了)

北朝鮮側も殺る)

咲樹の狙撃により脳内の物をぶちまけながら確実に死んだ死体を確認後、そのまま面倒なボディーガードを殺していく

(周りを確認するのはいいが狙撃手相手に止まるのは自殺行為だぜ
?)

難なく頭を撃ち抜く

だが、さすがにここまで来ると銃口から出る発砲の光で位置がバレてしまい相手からこちらに銃撃が始まる

咲樹は鉄骨を盾にして応戦する

(ゲームじゃ簡単に見えただけど・・・反動やら向やらで頭出して打てねえ!)

咲樹はなんとか横から狙撃で応戦する

「ガアツ！・・・いてえ」

利き腕の一の腕を弾が貫通した

狙撃銃をその場に置き、予備の武器を出す

コルト・アナコンダ

デザートイーグル並みに破壊力があるリボルバー式のハンドガンである

しかし、利き腕じゃないため当たるわけではなく防戦一方・・・

だが、そんな時屋上に自分を呼ぶ声が響いた

「咲樹！」

「薰、ここだ！」

咲樹は鉄骨から大声をあげながらアナコンダを連射する

敵側はあいての増援に形成が逆転し、戸惑いを見せた

が、形成は再び一気に逆転した

『バララララッ』

上空から敵側の武装ヘリがこちらに向かって来ていたのだ

「総員、隠れろ！！」

ライデンの指示に咲樹は身を低くし、薰達、突撃組は慌てて屋上入り口から中に入る

その瞬間、ヘリのガトリング砲が火を吹き、敵側の鉄壁となつた

「クソッ、薰達が・・・」

ガトリング砲は屋上側を集中狙い、敵ボディーガードはこちらを狙つてゐる

その間にターゲットは着陸したヘリに乗り込もうとしていた

「狙うしかないか・・・」

咲樹は左手でTRGを拾つと鉄骨を支えにしながらスコープを覗く
もちろん、銃弾の嵐の中だ

(下手に苦しませない・・・即死だ
一発で楽にさせてやる)

咲樹は必死にスコープの標準を合わせる

「イッテエー！」

頬を弾を擦るがスコープを覗く

サブマシンガンをぶつ放すボディーガードは無視

ガトリング砲を打ち続ける敵兵士の側頭部を標準を合わせ、引き金を引く

『ドオーン！』

うるさい銃弾の嵐の中さらに大きな音が一発の弾丸により静寂が引き寄せられた

その一発によりガトリング砲の壁は突破され、すぐさまライデン達が雪崩混む

敵側は慌ててヘリに乗り込み、ボディーガードがガトリング砲を打とつとしたが・・・

「させらるか！」

薰はAK200を連射する

毎分600発できるAKシリーズの攻撃力は世界でも有名である

ボディーガードの男達は防弾チョッキに包まれていない頭や手足を撃ち抜かれる

しかし、同時にヘリの離陸が始まった

「逃がすな！」

パイロットのいるコックピットを狙うが防弾済みのコックピットに

銃弾が届くことはない

咲樹も機関部を狙うがへりによる風により、狙いが定まらない
惜しくも北朝鮮側の外務省の暗殺は成功できなかつた

「咲樹！大丈夫か！？」

撤退すべきため咲樹の回収に薫は向かつ

「ハハ・・右腕が使い物にならねえ
武器持つてくんないか？」

「お前が無理しやがつて・・・」

薫はTRGとAKを肩で背負いつと咲樹をお姫様抱っこする

「隊長、咲樹が怪我をしたんで俺が運びます！
脱出の際、援護お願いします」

「わかった、総員迅速に脱出しろ！
急げ、この国の犯罪者になるぞー！」

そして薫達は北朝鮮のミッションを終わらせたのであつた

第十三発田（前書^{ゆき}）

あれ？・・・咲樹が暴走しなかつた

つか、半チート？武器を出してしまった

第十三発目

北朝鮮から脱出後、咲樹達は船やヘリを使い、追手をやりと振り切つたのがインド付近だった

ヘリからコーラシア連邦の母艦に着陸した今、インドの軍港で補給整備をするため停泊している

そして現在、咲樹と薫はライデンと共に街にいた

「ライデン隊長

こんな街に何かあるんですか？」

「実はここに知り合いの武器商人がいてな
ちょっと見ていくついでにお前達を連れて來たんだ
カスタムとか金がかかるかもしけんがしてくれるからな
だからお前らに武器を持たせたんだ」

「「カスタム!?」」

ライデンの言葉に一人は目を輝かせた

自分なりに武器を改造できるのだ

内心でどうカスタムしてもらつか悩み始めた

市場の脇道を抜け、住宅街に入り、水路が見えると橋にいる占い師に出会った

「すまないが占って欲しいものがあるんだが」

「何をだね?」

((?))

いきなり占いを始めたライデンに一人は首を傾げる

「俺と鉛との出会いをだ」

ライデンがそう答えると占い師は目を見開き、驚いたがすぐに笑みを浮かべた

「後ろの建物の地下だ
階段は建物内の右壁隅」

「ありがとう」

そつライデンは礼を言つと建物に入り、一人も慌ててついていく

「ライデン隊長今のは・・・」

「まあ、あれだ

限られた客しか扱わない店でな
そのためのパスみたいなもんだ

さあ、着いたぞ」

ライデンが建物の言われた壁を押すと中は壁掛けの明かりによつて
照らされていた

そして壁には数多くの銃が並べられていた

「スゲエ・・・」

「なんて数だ・・・」

咲樹と薫は圧巻されていた

「久しぶりの軍人客だと思つたらお前だつたか、ライデン」

「たまたまこの港に寄つたからな
今日は頼りになる部下が客だ、ジーン」

ライデンと親しげに会話してる眼鏡を掛け、インドでは珍しい金髪
白人の男性はジーンというらしい

「アレン・フォーマット大尉です」

「サキ・ミーシリア中尉です」

二人は敬礼をし、挨拶をする

そんな二人にジーンは笑みを浮かべた

「ハハ、いい挨拶だ

さて、先ほどの反応を見るからにカスタムしたいのだろう?
銃を見せてくれないかい?」

そう言われ、薰はボストンバッグからAK47とAK200を取り出す

咲樹は長めの布袋からTRG21を出した

「ほお、二人とも破壊力のある銃を使つてるねえ

どんなカスタム希望だい？」

「私はサプレッサーとカーマルスコードを買えればいいです

あとL96A1ありますか？

一応、予備のSJRとして買つておきたいんですけど・・・」

「その銃ならそつちに立て掛けであるよ

見てきたらどうだい？

さて、アレン大尉はどうあるべ..」

ジーンは咲樹にそう言つなり薰からAKを受け取りながら聞き出す

「俺はAK47がメインだからコイツにレッヂドットサイトに銃剣、
200にはグレネードランチャーとサプレッサーをつけてくれ

あとはM4A2あるか？

あつたらそれにもサプレッサーとグレネードランチャーをACOG
つけてくれ」

「ずいぶんカスタムするね

ACOGつけるつてことは狙撃用かい」

「アサルトで狙撃用?」

咲樹は一人の口から出した『ACOG』とこう言葉から狙撃とこうことに疑問を感じた

「ああ、遠距離をアイアンサイトで撃つのはさすがに自信ないからな
だからACOGなんだよ」

「SR使えばいいじゃない・・・」

「前線でそんなボルトアクションのSR扱えねえよ

それができるのはお前みたいな狙撃手だけだ

ショットガンの要領で撃つスナイパーなんて普通いないぞ?」

「俺もできないな

咲樹の当然のような呴いた言葉を薫はため息まじりに否定し、ライ
デンは当然のように同意した

しかし、初耳の人には笑いのネタになつたのだろう

「アハハ、ライデン

その話は本當かい!?

前線でSRを使うなんて信じられないよ!」

いまだに笑うジーンに咲樹はちょっと不機嫌になり、言い返す

「スナイパー・ライフルは遠距離を撃つても威力が落ちないよつに作られてるのでしきつ？」

なら近距離で当たられたその弾丸は絶大だと思いますよ？」

「だけど標準を合わせるのは並大抵ではないだらうへ。」

そう言われた咲樹はこの身体に最初からなつていないのでゲーム感覚できましたとは言えずに・・・

「銃口の向きと多少の調整でできました

近距離なら風や湿度の影響はそこまで考えなくていいので」

と答える

それを聞いたジーンは・・・

「ライデンが嘘をつくとは思えないし・・・

「ライデン、こんな逸材隠してるなよ」

咲樹の正直な瞳を見たジーンは納得したかのように頷くとバシバシとライデンの肩を叩く

「すまんな、このゾンビはハッキリ言って俺の部隊の主力だ
実力だけなら俺以上だ」

「そつなのか・・・」

ライデンの苦笑混じりの答えにジーンは考え込む

その表情は真剣そのものだ

「ライデン、頼みがある

その二人の実力が本物だと信じよう
昔からお前のコンビだったからな

そこで頼みがある

報酬は今回のカスタム代をチャラとプレーティーを用意する」

「「プレーティー！？」」「

咲樹と薫は驚愕の表情を浮かべた

RQ・1プレーティー

戦場をひっくり返す対地上用兵器だからだ

しかし、その兵器は無人機型ミサイル航空機であり、航空機パイロットとミサイル制御の遠距離による操縦なため、誤射や命中しにくい事が多い

だが、威力は申し分ないのだ

咲樹や薫もオンラインゲームをやつてた際に出てきた兵器だった

「・・・どんな任務だ？

そんな兵器を用意するなんて重要な依頼だろう?
危険度はかなり高いはずだ」

ライデンの声は低く冷徹な軍人な表情であった

戦略兵器が出てくるほどだ

ジーンも冷や汗をかきながらカウンターにあるパソコンのキーボードを叩く

「これを見てくれ

情報仲間がロシアのコンピューターにハッキングした情報だ

場所はアラスカだが、こんな戦時中だ
たぶんロシア軍に侵略されたんだろう
そこの奴が教えてくれたんだが・・・

この潜水艦なんだけど

ボレイ型原子力潜水艦

ミサイル巡洋型潜水艦だから武装は攻撃型なんだ
そしてこの潜水艦には「核弾頭か」

ジーンの言葉をライデンの重い一言で遮る

ジーンはコクリと頷くと少し間を置いてから説明を再開した

「UJのミサイル目標はドイツ国境とワシントン
しかも厄介なのはステルス性弾頭ミサイルなんだ

だから今回はこの潜水艦の破壊とできたらデータを盗つてきてほしい

重苦しい雰囲気が4人を包み込む

だが、その沈黙をライデンが破った

「上層部に報告した上で決める
通信コードはなんだ？」

「9443 AG5

頼む、ドイツを救ってくれ……」

「善処するぞ、相棒

じゃあ、また連絡するぞ
そいつの銃はその紙に書いてあるところに送つとこしてくれ
行くぞ、アレン、サキ

そつまつて出でこくライテンに続く薫
だが、咲樹は出ていく際にあるものを見つけた

「この銃……
ジーンさん、これTRGですよね！
買つていですか！？」

そつまつて咲樹が掲げたのは赤い塗装にマガジンがなぜかお椀のように丸くなつたTRG-21だ
だが、ジーンは驚愕の表情だった

「なつ、なんで持てるんだー！？」

「えつ？

普通に持てましたよ？
なんかあつたんですか？」

咲樹は普通じゃないジーンの反応に首を傾げる

「その銃はいつの間にか普通に置いてあつたんだ
どかそうにもとてつもなく重い上に銃やバーナーでも壊れない呪わ
れたような武器だ」

「ええっ！？……

普通に持てたんですけど・・・」

「なら金はいらないから持つてくれ！」

「ああ、あとコイツも持つてくれないか！
そのＴＲＧと一緒になんだ！」

ジーンがカウンター裏を指差す

咲樹はカウンター裏に回るなりその銃を見ると驚き、思わず渴いた
笑い声が出た

「ハハッ、『りや嘘じやないみたいだな』

そこには銀色の塗装に竜の柄があり、少々長めのマガジンに銃剣が
ついたAK-47があった

難なく持ち上げた咲樹は嬉しそうに笑顔を浮かべた

「ありがとうございます！」

咲樹は礼を言つなり、薰を追いかける

「薰、 薰
これ何だと思ひへ。」

追い付いた咲樹は悪戯つ子のよつたな笑みで先ほどのAKを見せる

「なんだよつ―――つて、 これAKインフリーか―?」

「うん、 僕もTRGインフリー見つけた」

インフリー・・・Jはゲームの時のイベント兼課金武器であり、
予備マガジン無限の武器である

「まさか課金武器があるとはな・・・」

「ああ、 僕も驚いたよ

だけど」 れは助かる

弾の心配がなくなるからな

艦に戻つたら試し撃ちしてみるか」

(つー／＼＼＼)

薰は咲樹の妖艶な笑みについドキリとしてしまつた
女性になつてからその笑みは男性の薰には刺激的であつた
氣を紛らそと薰は咲樹の頭を撫でた

「つたく／＼＼＼

「ナイスだよ、咲樹」

「うわっ！？」

やめろって！／＼／＼／＼

撫でられることに恥ずかしいのか咲樹は赤面しながら暴れる

そんな一人を見たライデンはつい微笑んだ

（さつきまでの暗い雰囲気だったんだが、すぐに明るくしおつて
まあ、あの一人だからこそなんだろうな）

「おい、いつまでもイチャイチャしてないで艦に戻るぞ！」

「なっ！？／＼／＼／＼

「イチヤついてません！／＼／＼／＼

慌てて身を離して言うが真っ赤にした顔では説得力には欠けている

「わかつたから行くぞ！
じゃないと置いてくからな！」

「「はい！」

駆け寄つてくる一人に背を向け、ライデンは空を眺めた

（あの一人に任せて見るかな・・・）

今もどこかは戦場になつてゐる

しかし「この戦場じゃない場所の空を明るく澄んでいた

第十四発目（前書き）

急展開と言われましても、作者は文才がないものでして・・・

ああ、サドンアタックも最近できないし・・・

サドンアタックやつてる人います？

Tales of the rabbys

つて名前です、見つけたら一聲お願ひします m(—)m

第十四発目

艦に戻つた薰と咲樹は早速艦内の射撃訓練場で試し撃ちをしていた立ち撃ち、しゃがみ撃ち、三脚を使う固定撃ちなど計五発撃ちリロードするためマガジンを引き抜く

そこには咲樹の予想通り『なぜか』弾が消費されていないマガジンだつた

撃てるか試すため再び五発撃つ

弾には問題なし

しかし、上限は五発までだつた

だが、これは完全な無限マガジンのついたTRGだつた

「マジかよ・・・」

予想はしたが改めて反則だと思った

上限は五発だがマガジンの取り替えは引いて、すぐに再び入れるだけマガジンの取り回しの時間の短縮や予備マガジンの重さの軽減、弾数の心配解消など十分な反則物だ

「咲樹、確認終わつたか？」

「ああ、終わつたよ

どうだつた、AKインフィー？」

咲樹の質問に薰は満足そうに笑顔を浮かべた

「最高だぜ、ゲームの時はさほど感じなかつたけど弾無限って最高だ
弾の心配もしなくていい
リロードも早く終わる
しかも銃剣の切れ味も問題ない
咲樹も同じだろ？」

「うん、薰と同じだつたよ
これなら予備にカスタムTRGかL96A1を状況に応じて持つて
行けばだいぶ戦いややすいよ」

「ホントお手柄だ、咲樹」

薰に誉められ、咲樹は恥ずかしく感じながらも役にたつたことを嬉しく感じた

すると射撃訓練場のドアが開かれた
今は咲樹と薰しかいない
つまり、新しく入ってきたようだ

人数は一人

しかし、入ってきた連中の顔は見覚えがなく、軍服も咲樹達と違い
海軍の物だった

「おいおい、先客がいると思つたら女連れかよ」

いかにも柄の悪そうな金髪の男はこちらを・・・薰を睨み付ける

「なあ、彼女」

そんな男じゃなくて俺たちと一緒にやらないかい？
楽しくやろうぜ？」

もう一人のスキンヘッドの男は笑みを浮かべながら咲樹に手招きます
がその視線に咲樹は悪寒を感じ、身を引く

「誰があなた達みたいな下心丸見えな人とやるもんですか
アレンといったほうがずっと楽しいわ」

一応、冷静なのだろう

他人の前ではしつかり女らしい振る舞いをしている

(咲樹もこいつ女性らしい言い方とか振る舞いすれば可愛いんだよな
てか、あの一人に油注いでるよな・・・あちらさん明らかに俺に敵
意向てるよな)

薫は苦笑しながら小さくため息をつく

「それにあなた達みたいな人とやつたら射撃の腕が落ちそうです
アレン以外に教わるなら一人でやつたほうがいいです

だからあなた達みたいな雑兵に興味ありません

ブチッ！

田の前の海兵の状態を現すならそれが正しいのだろう
薰は今度は明らかにため息をつく

「おい、テメ！」

そこまで言つたら勝負しやがれ

時間は10分2セットで倒した総数で勝負だ

あと、女

負けたらお前は俺のもんだ」

「別に構わないわ

そつちも一人いるんだし、2-2でやりますよ

確実に潰してあげるわ」

「上等だ！」

必ずお前を泣かして、夜はいい声で喘がせてやるぜー。」

連中はそつ言つなり先に射撃場に入る

それを見た薰は盛大にため息をつく

「なあ、お前はなぜそつ厄介な方に持つていく？」

「だつて薰を馬鹿にされたみたいで嫌だつたから……」

「だからつてな」

負けたらお前どつなるかわかつてゐのかよー。」

「それはそうだけど……」

薰の言葉に咲樹は言葉を詰まらせるがそれでも薰に真正面から強く
言い

「薰を信じてるから」

(ツー！／＼＼＼)

咲樹はそれを言うなりさつさと銃の確認など射撃準備をした

(あんな言葉・・・反則すぎる／＼＼＼

そんなん言われたら尚更負けられねえじゃん・・・)

薰はニヤけそうな口を抑えながら内心を落ち着かせよつとした

するとそこで、ブツブーというブザーがなる

連中の射撃が終わったようだ

「薰、俺たちのコンビネーション見せつけてやるぜー！」

明るい笑顔で言う咲樹の表情に薰はフツーと深く息を吐き、心を落
ち着かせる

(そうだな、ゲーム時代5年からの相棒だもんな)

「ああ、そうだな」

薰はAK-47インフィニーを持ち、射撃訓練場に入る

今から二人のやる射撃訓練場は横4メートル縦15メートルの射撃場であり、5分で1セットのそれが2つ

ターゲットは自動ランダムで出現し、障害物も少しは置いてある

全部でターゲットは5以内に30は出でくる設定である

そして先ほどの連中は20・18

つまり、計60中38、6割は倒しているといつ好成績

二人はそれをさらに上回る必要があるので

薫は左側に立ち、AKを

咲樹は右側に立ち、TRGを

そんな一人に連中は笑い声を挙げた

「おいおい、ボルトアクションのSRで大丈夫かよ！
こりや、勝てたな！

ギャハハハ！」

盛大な笑い声の中、ブザーがなり、すぐにターゲットが出現する

右側と真ん中木箱裏と左側に1体ずつ

パン！ドンッ、ドンッ！

と3発分の銃声が鳴る

薫は1発でターゲットの頭を撃ち抜き、咲樹は真ん中と右側のターゲットの胸辺りを撃ち抜いていた

その速さに連中は笑い声が止まつた

だが、二人の速さはそれで止まらなかつた

薫は左側を咲樹は右側を真ん中は互いにターゲットを撃ち落としていた

「リロード！」

咲樹の声に薫は真ん中に移動し、多少撃ちこぼしながらもターゲットを落としていく

そして咲樹のリロードが終わるなり交代し、薫がリロード
咲樹はハンドガンでターゲットを撃つていく

それを繰り返して行き、結果は・・・

前半が25で後半が23

合計が48で圧勝であつた

「私達の圧勝ね

相手の力量見てから喧嘩仕掛けなさいよ
行きましょ、アレン」

咲樹はそつ切り捨てるなり出入口から訓練場を出ていき、薫も着いていく

「あ～、スッキリした」

「お前、容赦なくやつたな」

薫は咲樹の満面の笑みに一息つく

昔から咲樹はああいつた天狗伸ばしている輩を見つけては完膚なきまで潰していたのを思いだしてしまったのだ

「だがあんな危険な賭けに次から乗るなよ？
負けてたらどうするつもりだ？」

「負けてないじゃん
てか、負けること考えてなかつた」

咲樹は自室に着くなり武器を置いて備え付けのベッドに座る

「考えりつつの

心配する」ひたちの身にもなれつつの」

薫も武器を置き、簡易冷蔵庫から「一ラのカン」を出し、飲みながら答える

「ゴメン・・・」

「つたぐ、もうこの話は終わりだ！」

しんみりしそうな雰囲気を薫は一言で断ち切る

薫は話題を変えようと勧める

するにあることを思い出した

「咲樹、やつこやこの世界つて俺たちがいた世界と変わらない世界
だつたよな？」

「うそ、それがどうした？」

笑顔を浮かべながら話す薫に咲樹はわけがわからなく首を傾げた

「この世界にも『第三次世界大戦』あるかもしないだろ？」

「ああ、やつか！？
じゃあ・・・」

「帰つたら早速パソコン買つてやつてみよぜー！」

咲樹はベッドに寝転がりながら顔を緩ませる
わざと楽しみなのだから

そんな咲樹を見ながらも楽しみにしてる自分に薫はテンションが上
がる

「やつやつ、忘れるところだった

咲樹はわざと俺にかなり心配させたんだ」

その言葉にビックリと身体を震わせる

「アハハ、せつかもで忘れよつとしてませんでしたか？」

苦笑しながら咲樹は近づいてくる薰から離れよつとするが金縛りの
よつに足は動かない

そのまま薫は仰向けの咲樹にのし掛かる

「えつと、何する気?」

一応、聞いてみる

「何つて、オシオキ
ついでに女になつた咲樹を弄るのは初めてだからな
いろいろ試すぞ?」

「えつ? / / / /

咲樹はドキリと胸が高鳴るのが同時に混乱になる

(なんでこんなにドキドキすんだよー?
薰のお仕置きだぞ!)

つか、コイツまさか!?)

咲樹は逃げよつとするが胴体はガツチリ薰の両足で挟まれてホール
ドしている

「逃がさないぞ?

今まで散々我慢したんだ

ちゅこと発散をせんりつせん。

「こつやあああああつー。」

女性軍人が数少ないむか昔しい戦艦の一室は羨ましい女性の声がしたとさ

作者「何だい？ナニはしてないよ？

まあ、セクハラ紛い行為は知らんけど、そこは皆様の『想像におまかせします

ちなみに作者は女友達を気持ちよく鳴かせたたら

『お前、絶対Sだろ！』

と言わってしまいました

弄るのは楽しいのに

(ー、・、・、ー)

さて、次回は久々にメアリー出します！

第十五発目（前書き）

急展開すれども？

文句は聞く

だが直さん！

だつて早くラブ見たいもん
作者はラブコメ大好きッス

咲樹君がサキちゃんになりました

あつ、あと後書きにて
テキトーなお知らせあるよ

第十五発目

北朝鮮から帰国して一四年

「ふあ～、飯」

加藤咲樹こと

元男のサキ・ミーシリアはベッドから起きるとシャワー室に行き、身嗜みを整える

髪の手入れや軽い化粧を終え、白いワイシャツの上に茶色のジャケット、ジーパン、黒のロングブーツという簡単な服装にし、長い綺麗な金髪は一つに束ね、ポニーtailにする

最後に護身用にジャケット内ポケットにコルト社のアナコンダ一挺とサイレンサー用のサプレッサー

予備マガジン二丁

背中にバリステイックナイフを装備

「薰はまだか・・・」

幼なじみに相棒であり、共にこの世界に来た親友の山崎薰・・・の人格を持つアレン・フォーマットを起しきなこよう咲樹は扉を閉めた

「あつ、お待たせ」

「うん、大丈夫よ
そんなに待つてないから」

咲樹はロビーで待っていたメアリーと合流する

メアリーは白の斑点模様のワンピースに薄灰色ガーディガン、肩まである茶髪はカールが掛かっている

咲樹は素直に可愛いと思った

「メアリー、その服装似合つてるわよ」

「ありがと、サキ
けどサキはいつもワンピースとかミニスカートとか着てるのに今日はずいぶん変わった服装なのね」

そう言われた咲樹は内心でギクリとなる

(まあ、あつたよ
たくさんありましたよ！)

けど、なんというか抵抗感がありましてね

今日は勘弁してください(

「アハハ、今日はちょっと霧因気変えて見たのだけれど変じゃない？」

咲樹はなんとか誤魔化そうとした

「うん、変じゃないよ
それにカッコいいわ！」

「や、やつ？ よかつたわ」

(なんとかなつた…)

咲樹は小さく息を吐く

過去の経験からメアリーはダメだししたひつねをくなどわかつて
いたためである

「それじゃ、行きましょ

今日は一日遊び尽くすんだから！」

「うん、行こ」

二人はいい天気な空の元、基地から街中に向かった

「いっぴい買い物したわね」

「ええ、普段お金貯めてた甲斐があつたわ」

（おかげで服が増えたけどな・・・）

二人は今、街中の噴水がある広場に構えるレストランに来ている
咲樹はフルーツヨーグルトパフェ
メアリーはレアチーズケーキとモンブラン

甘い物は別腹です

これは女性特有の名言らしい

現に咲樹も女性になつてからとくに「うものの甘い物は好きになつた

そんなこんなで甘い物を堪能している一人

そしてやはり、会話は甘い話になつた

「ねえ、ねえサキ

そろそろ幼なじみの子の顔みたいのだけれど進展ないの？」

「なつああー?／＼／＼／＼

パフェを食べてる最中だつたら吹き出してただらつ・・・それくら
いまで驚かされ、完熟トマトのまゝに顔を赤くされてしまった咲樹

「なつ、何を言いだすのよ！／＼／＼＼

焦りながらよく言葉使いが地にならなかつたとあとで称賛した

「だつて、いつつも一緒にいるのは今も昔も変わりないじゃない
キスだつてしてるんでしょ？

なら、そろそろシてもいいんじやない？」

メアリーに言われた咲樹はつい想像してしまつ

薫と深いキスをしながらベッドに押し倒され、衣服を脱がされながら自分の身体を触つていき、最後に――――――

（無理、無理、無理つ――――！――――

恥ずかしすぎる！――――

いや、そりや少しは興味あるけど・・・・

うん、無理、無理！

恥ずかしすぎて、死ねる――）

もし咲樹の頭に煙突があつたら煙が勢いよく吹き出してたいるだろつ

顔を真っ赤にしながら両手で顔を覆い、何か呟く旅に左右に身体を揺らす

一人で赤面し、トリップします

「あつ、あのサキ！？」

お願ひだから、戻つて来て――」

自分で仕掛け置きながら予想外にトリップした咲樹に慌てて現実

に引き戻そうとするメアリー

おかげで田を覚ました咲樹は恥ずかしいのだろう
下を向き、俯いている

「つまりまだシてない

図星なのね？」

メアリーの問いに咲樹は口クリと頷く

「いい？ 女は度胸よ？
アドバイスするからしつかり聞きなさい！」

こうして咲樹は女性になつてから初めての女性の性勉強をした

その夜

部屋に帰り、シャワーを浴び、後は寝るだけになつた夜

（確かに薫は今まで信用できるし、今も頼りになつて信用できる『

男』

俺が『女』になつたからか
異性にしか見れない時はあつた・・・
認めたくなかったけどな

だけど、まあ俺も男だつたし薫が理性の我慢はわかる）

咲樹は今振り替えつて見れば薰の我慢強さに驚きしか思い浮かばなかつた

(だから、うん)

今はさすがに無理だから」わくらにならいよな／＼＼＼＼

薰！

「咲樹？寝るのか？」

携帯を弄つてゐる薰は首を傾げる

そんな薰に咲穂は一気に近づくと薰の顔をガツチリ両手で掴むと唇を重ねる

その間は一秒ほど

すぐに身体を離す咲樹

「これが今の気持ちだ！」

この変態力魔三

それを言うなり咲樹は猫のようベッドに素早く潜り込む

今日は咲樹が女の子になつて大きな一步を踏み出した日だった

オマケ 薰の脳内心理

キス！？

しかも小学生みたいなお子さまがチューでもなく

アダルトバー ジヨン
大人のキスだ

likeじゃなくてloveのキスですよー!?

今田ニ田ノ送勘一阿ガゆハ也!?

しかもなんだよ、あの感触／／／／

めつちや柔らけえ上になんといつか心地いい・・・

何あれ、最高やん・・・

気持ちよかつたわ

あつ、けどな

最後のあの称号はヒーロー

あれって某RPGゲームシリーズでスケベな称号じゃねえか！

だが！！

「俺、マジで惚れていいッスか？」

男性本能に忠実な薰君でした

第十五発目（後書き）

銃のリクエストあつたら聞きます

感想で言つてください

第十六発目

——— 3、2、1

無線を通じ、合図と共に目の前の僅かに見える兵士をサプレッサーで音を押さえながら暗殺していく

咲樹と薫は吹雪の中、静かに暗殺して行きながら基地内部に進んでいく

遡ること約一日前

あの武器屋の情報を信じ、上層部は特務部隊に破壊工作を命令したそして命令されたのは咲樹と薫の一人だった

「これは極秘任務だ

失敗は許されない

公にできない任務だからな

報告書も始末書も必要ない

必ずミサイルを阻止しろ

軍の上官達のプレッシャーに耐えながらも一人は任務に了承した

そして今現在、咲樹と薫はサプレッサー＆心音センサーを使い、基地内部への侵入をしていた

『咲樹、そこの建物を右に曲がったところが入り口だ
敵は?』

無線からの声に咲樹はサプレッサー＆心音センサー付きのTRGのスコープを覗く
赤外線式であるサーマルスコープであるため周りは青だが熱のある人間は白く写る

「入り口に一人だけだ
俺が狙撃して倒す」

狙うは頭

パシユツ

距離は10メートル
だがこの吹雪の中だ

咲樹も相手も互いに姿は見えない

スコープ越しに見える白く映る頭部に風の修正を加え、狙う

放された一発は静かに相手の眉間に貫通し、命を奪つた

「・・・クリア」

合図と共に薫は先行する

銃口を出しながら扉を開ける

なにやら話をしている兵士が二人いた

（倒せるがな・・・

ヘルメしてるから、頭はキツイし・・・）

薫は銃剣をセットする

静かに一人に近づく

狙う一人目の喉を躊躇なく刺し、そのまま連射
首を蜂の巣にする

もう一人が振り向いてくるがそれと同時に抜いていたグルガナイフ
を相手の顎下から突き上げる

勢いよく血を吹き出しながら相手は身体を痙攣させながら倒れた

「クリア・・・ふう」

ナイフと銃剣の血を振り落としながら呟く

「大丈夫か？」

「ハハ、もう慣れたよ
なんともないさ」

心配してる咲樹に薰は笑顔で頭を撫でる

『人殺しに慣れる』

一般の高校生だった二人は数ヶ月で生きた人間を殺すことに慣れた
のだ

「お前だけ辛い思いさせないからな」

「サンキュー」

二人はそのまま進む

「次を左に行って、突き当たりを右、一本目のドアを開けて階段を
降りる」

咲樹が小型の携帯のような機器に映しだされた地図を見ながら先行
する薰に伝える

左に曲がり突き当たりまで行こうとした時、ちょうど三人組の兵士
と鉢合わせになつた

「マズイッ！」

薰はまだ武器を構えてない内に片付けるようとAKを連射する

一人、二人と片付けるが仲間に隠れてたもう一人が銃を構えていた

「クソツ！」

薫が標準を合わせようとした瞬間

ヒュッ！

耳元を何か通過した音と同時に敵が吹き飛び、胸を抑えて死んだ

「助かった、咲樹」

「まさか現実でクイックショットできるとは思わなかつたけどね
銃声がならなくて良かつたよ」

互いに胸を撫で下ろす

一人はこの墓地相手に正面からまともに相手をしたくないのだろう

「うわ・・・マジで潜水艦マップじゃん」

「咲樹、頑張れ」

階段を降りた先は中央に潜水艦が佇んでおり、たぶんまだミサイル
を積んでいないのだろう
ミサイル発射口は中を空洞に開いたままである

そしてここは一階から三階になつており、中央の潜水艦を囲むように道があり、潜水艦側の壁吹き抜けになつている

つまり丸見え状態

狙撃しやすい「マップ」だが逆もしかりこちらの動きも相手にわかりやすいのだ

「あの潜水艦壊すんだよな・・・」

「ああ、後はデータを盗らねえと」

二人は物陰に隠れながら辺りを見回す

「けど、潜水艦マップ思い出す限りあそこだよな」

「だよな・・・」

二人が見る先には三階の中央にある少々大きめの部屋
しっかりと壁で囲まれている

「どうする？」

「破壊とデータ別れたほうがいいかな？」

「だよな・・・潜水艦はプロペラんとこに4仕掛けくれたら逃げ道確保してくれんね？」

逃げる時は絶対ドンパチだからな」

「わかった・・・即行で援護にいく」

そして二人は別れた

「とりあえず、一階だな」

一人が出てきたのは二階だ

薰は物陰に隠れながら反対側の通路行くため、向かって左側に行つた

咲樹は降りてきた階段のほうに戻り、さらに階段を降りていく

(クリアかな・・・)

TRGを構えながらそつと1Fと書かれた扉を開ける
通路には人影がない

そのまま吹き抜けになつてゐる通路に出て、物陰に隠れながら水辺に近づく

(実際見れば、そんなに深くないし、スクリューまで距離もないしな)

咲樹は水音を発させないようにさつと水中に潜る

(やつぱ冷たい!)

室内とはいえ、外は吹雪が降つてゐる極寒
当然、水温も低くなつてゐる

しかし、咲樹は我慢しながら作業を続ける

そのままスクリューと船体真下にC4を設置する

「ブハッ・・・」

咲樹はすぐさま水中から出て周りを確認

「さすがに全身ずぶ濡れは寒いな・・・」

ずぶ濡れで吹雪の中に行けば凍死する自信があるだろつ

移動しながらそう考えていると備え付けの自販機付近でタバコを吸つてゐる一人の兵士を見つけた

「・・・ちょいと風邪を引いてもらおつ」

咲樹はフラッシュュバンを取り出し、辺りを確認

人影があの兵士だけなのを確認すると田の前で止まるよつて投げる

そして兵士がフラッシュュバンに目が行つた瞬間

一瞬だけ強烈な閃光が辺りを包む

閃光を回避していた咲樹はすぐさま兵士に近づき、構えたコルト・
アナコンダのグリップ底で側頭部をぶん殴り、ついでに鳩尾を容赦なく拳を入れる

顎にも掌底を入れようとしたがすでに気絶しているのに気づいた咲樹は兵士を近くに連れていいく

「男もんだから『力イナ・・・まあ、内側に防弾チョッキ着ればいいか』

来ていた服はその部屋の「ミニ箱に
男は荷物の影に隠し、部屋を出る

「まあ、これでいいか」

見た感じ少々大きめの軍服を来た女性兵士の完成だ

咲樹は吹き出し通路から薫の向かつた部屋を見上げる

すると目標の部屋の窓に血が盛大に飛び散つていつたぶん異変に気づいたのだろう

同じ階の通路にいた兵士が慌てて部屋に走っていた

（データをまだ取ってるんだ、行かせない！）

咲樹はすぐさま物陰に隠れながら狙撃体勢に入る

「距離20、・・・せい！」

咲樹が撃つた弾は男の横つぱらを貫き、撃たれた勢いで半回転しながら地面に倒れた

『咲樹！データの回収は終わった！

援護頼む！』

「わかつた」

咲樹はすぐさま全範囲にいる敵をターゲットにする

吹き抜けの通路は「ちらの動きが丸見えなのだ

こつちの数は一人に対し、相手は基地単位

できるだけ減らしたほうがよいだろう

すると基地に警報音が響く

「いや、本格的にヤバい」

薫のほうに向かって走る兵士を片っ端から狙撃してると薫が走つてきたのを確認した

咲樹は薫の走つてきた方向にグレネードを投げてから、残っていたC4を階段の見えないとこに設置

先に階段を上り、階段上の安全確認

挟まれて身動きとれないのはキツイからだ

ドアを開け、左右を確認

「わつ、やば」

スコープ越しに見れば距離はあるが10人近くの兵士が通路をぞろ

ぞろ走つていた

「薰、急げ！」

階段を上つてゐる薰を急かせ、またに階段下から撃とつしてゐる敵にグレネードを投げつける

慌てて逃げる敵に銃は撃たれなかつた

そして通路の敵を狙撃する

しかし、敵側も銃を打ち、通路に弾幕が生じる

「クツソ、吹き飛べ！」

コンカツション（強烈な音で相手の三半規管に衝撃を与へ、一時的に動きを鈍らせる）
とグレネードを投げる

動きが取れない上にグレネードといつ鬼畜ハリシクスに通路の敵は爆撃に巻き込まれる

「すまん、待たせた」

薰はそつとそのまま先行する

咲樹も薰に続く

走り、走り続ける

捕まれば死ぬ

二人は今まで感じた中でも最高の恐怖感が逃走する集中力を促していた

薫は曲がり角ですぐさまクリアリングをし、咲樹は追つ手用にクレイモアを仕掛けしていく

(あと少しつつ!)

薫は次を曲がれば出口

そんな時、曲がった瞬間敵と鉢合させた

「クソツッ！」

目の前に3人の敵

薫は銃剣で一番近い兵士の心臓に一突き
すると咲樹がトマホークでもう一人の兵士の喉元に刺さり、崩れ落ちる

そこで残っていた兵士がAKS-47Uを吹かせる

狙われた薫は身を捻り、腕を掠めながらも直撃はさけた

薫を狙つた兵士は咲樹のアナコンダに頭を撃たれ、絶命

「大丈夫か、薫！？」

「掠つただけだ、ナイフショットだ！
行くぞ！」

二人は基地に潜入した裏口のドアを開ける

兵士達が慌てていくなか

物陰に隠れた二人は車庫に目を着けた

「車を奪うしかないよな・・・」の吹雪の中を走るのはキツイって

「なら、俺が行く
俺ならこの基地の軍服だしな」

そう言つなり、早速行動に移る

「おい、車を出せ！」

敵工作員が正面口から車を奪つて逃走したそうだ！

「なんだと！？」

おい、車を奪われたそうだ
おいかけるぞ！」

次々と車庫から出でていく中、咲樹も流れに乗るよつて運転席に座る

「おい、モタモタするなー早くだせ！」

「すみません！」

助手席に乗った兵士がそう急かす

次々と出でいく中、咲樹と兵士が乗る車は遅れていた

すると咲樹はニヤリと笑う

「油断大敵、敵は目の前だつつの」

「はつ？」

それが兵士の最後の言葉だった

ガチャ！

いきなり助手席のドアが開かれ、薫のクリティカルナイフが兵士の腹に深々と刺さり、側頭部を咲樹のアナコンダに撃たれる

「出すぞ！」

咲樹はクラッチを切り、ギアをあげながらスピードを上げていく

「薫、C4爆破頼む」

咲樹は運転しながら遠距離爆破操作のスイッチを薫に渡す

吹雪が吹く中、咲樹は慎重かつ急ぎながら基地から離れていく

「あとは逃げて、帰還するだけだな
爆破完了」

力チツと押した瞬間

基地から大きな爆発音が響く

原子力潜水艦を破壊したのだ
爆破威力は跳ね上がるだろう

薰は通信子機を出し、軍に帰還要請を出す

「こちら特務部隊所属
アレン・フォーマットです
データの強奪及び目標の爆破完了いたしました
至急、応援お願いします」

「了解いたしました

データを今から送る情報の場所で会う人物に渡したあと、海外沿いの工場に行つてください」

通信が切れ、子機の画面に「データが送られる

「・・・帰還するにしてもずいぶん遠回りだな」

「なんて書いてあるんだ」

追っ手がないことに咲樹は少し安心し、余裕を取り戻し、口調も落ち着いていた

「基地の麓の街に入つて、データの廃屋にあるトランクケースに私服があるからそれに着替え、駅前のホテルのロビーに待ち合わせしてゐる男性にトランクケースに移したデータを渡したあと港の工場で船で迎えにくるらしい」

「確かに・・・けど極秘任務だし、慎重に慎重を重ねる必要があるんじやない？」

「そりか・・・」

咲樹の返事に薫は頷く

なぜか薫は納得できない・・・いや、この通信に不安を抱いていた

おかしいと・・・

「おつ、街だ」

咲樹はパツと笑顔になる

だが薫は笑顔になれない気持ちだったが、気持ちを切り替える

「とりあえず街の近くで車を棄てたあとに街に入るか

さつさとデータ渡して基地に帰つて暖かい飯食おうぜ？」

「おつー！」

二人はテンションを上げて街を目指す

しかしこの時、二人は知らなかつた

自軍上層部が出した冷酷な指示を・・・

第十六発目（後書き）

ロシア語など外国語が理解できる理由

咲樹や薫が転生した際に人格や記憶を共有し、脳自体はサキやアレンの物なので知識も共有している

なのでロシア語を理解できたのだ

これと同じ理由で高校生の咲樹が運転できたのだ

ちなみに・・・

サキ・咲樹はロシア語、フランス語、英語、日本語を
アレン・薫はロシア語、英語、日本語、ドイツ語

しかし！

作者は日本語しか理解できていないんで外国語は登場するかわかりません

「俺は日本人だし、日本で暮らすんだ
外国語なんて使わないぜ！」

自分の親友が豪語した言葉に共感しました

第一七発目（前書き）

これはフィクションであり、現実のものではありません
作者の妄想から作り出されたおとぎ話のようなものです
ですから・・・無茶ぶつけありますよ

第一七発目

「ずいぶん寂しいホテルだな」

「そりやあ、こんな辺境基地近くだしな
ビジネスホテル並みなだけマシだろ」

咲樹と薫はホテルのロビーでデータを受けとる人物を待っていた

2人の服装・・・

ボロボロの家にあったトランクケースには私服というよりスーツがあり、防寒用にロングコートがあった

2人はすぐさま着替え、武装はトランクケースに入るよう分解し、ハンドガンやナイフはロングコートの内側隠す

ビジネスマンの取引のような2人はロビーのテーブルでミルクティーなど飲みながら待ち時間まで待つていた
金は服と一緒に少しばかり入っていたのだ

しばらくすると紺色のスーツを来た金髪短髪のサングラスをかけた男性が歩みよつて來た

「フオーマット大尉とミーシリア中尉ですね？」

「お前はー?」

2人の前に現れた男性・・・いや、青年は特務部隊の後輩に当たる

青年だ

ロイアット・AIN

元気なのが取り柄で20という若さで入隊したルーキーであるアレンとサキに次ぐ逸材と言われ、ムードメイカー的なキャラだ歳も近いことで2人をよく慕っていた

「・・・アレン先輩、サキ先輩データを・・・」

「あっ、ああ・・・」

ロイのいつもと違う、生真面目な雰囲気に、惑いながらも薫はコクりと頷き、データの入ったトランクケースを渡す

するとロイは周囲を一度見渡し、耳に着けてた通信機を切つた

そして焦りながら説明する

「先輩・・・今、軍隊が街に降りて来ています」

「やつぱり、降りてきたか・・・」

「ロイ、脱出の手筈は?」

薫の舌打ちに咲樹はロイにそう聞くと、彼はフルフルと首を振る

「・・・ありま、せん

先輩達には脱出の準備がありません

「えつ・・・・?」

ロイの震えた答えに咲樹は耳を疑つた

「どうこう・・・こと?」

「軍の上層部は・・・先輩達を捨てました
情報の入手と潜水艦の破壊破壊したあと余分な情報を知つてゐる先輩
達を消すことにしたそうです・・・」

「んな・・・ばかな・・・」

薫はガクガクと足が震え、咲樹は信じられないといった表情だ

ロイはそんな一人にすがるような目で持つてきたケースなどを渡す

「・・・これは渡します

そして必ず生きてください

俺はあなた達先輩には生きて欲しいです

もし・・・ここに行けばライデン隊長が助けてくれます

渡されたのは一つの携帯とトランクケースとカードの入った財布

それと同時にホテルに三人ほどの武装兵士が入つて來た

「俺が時間を稼ぎます・・・

兵士が出たら一般人を装つて出てください

これはお金です・・・

絶対生きてください、先輩！」

今にも泣き出しそうなロイはそう強く言つとすぐに表情を切り替える
こんな性格でも特務部隊の一員だ
ロイはロシア語で何か言つとすぐに兵士達と一緒にホテルを掛け出
ていった

「・・・咲樹」

「薰・・・」

多分2人の表情はまさに絶望という表情だらう

だが、先ほどの説明と兵士・・・

嘘ではないだらう・・・

余分な情報・・・末端の兵士には要らぬ情報を持つてるのは上層部
からすれば余分な芽

替えはいくらでもいる・・・何千万という兵士の中の2人だ

咲樹はふつぶつとなぜか冷静になつていぐ
まるであのテロ事件のように

「薰・・・行こう

何がなんでも生きなわせや

「えいじー。」

「その携帯に載つてるとこが

「どうして行くんだ?

見てみるよ・・・インドのあの店だぜ!~」

そう・・・

携帯に載せられた住所を調べたら、セイはインドのあの店だった

「駅から逃げればいい」

「封鎖されたんの? か?」

その言葉に咲樹はコクッと頷く

「わかつてゐる・・・

だからここに見つかればいい

「なつ!?

それじゃあ、意味が「で全員倒す」

「まつ?」

本田一回田である

耳を疑つた

今、咲樹は全員倒すと言つた

つまり少なくとも50人近くを相手にすることだ

「弾なら無限にある

サブミッション、孤城戦を実現するだけ

だからこそ見つけてもらつ」

孤城戦―――

ある工場にある三階建てのビルの屋上で5ラウンドに別れて次々と現れ、攻めてくる兵士を倒しきればいいといったゲームだ

兵士の数は1ラウンド20人ほど

だが現実にやるとしたらかなりキツイだらつ

しかし逆にこの街で逃走劇をやるよりも成功すればかなりの確率で生き残れるだらつ

今のうちに準備をして迎え撃つ

「ロイには悪いけどここから一般人装つて脱出なんて無理だ

周りは海と雪

駅は封鎖だからな

だから脱出じゃなく迎撃

それにも・・・

俺はまだ諦めてないわ

この戦争、クリアしていないし、

俺たち死んだらメアリーだつてきつと悲しむ
だから帰ろう?

生きて帰つてメアリーの迎えに行け!

「咲樹・・・」

今まで何かしら面倒を見てきた弟のような幼なじみがいつの間にか
大切なパートナーになっていた

そしてそのパートナーが今、大きな賭けに乗ろうとしている

そんなハイランクな賭けに薫は自分で何か吹っ切れた感じになり、
同時に今の咲樹に感謝した

「つたぐ・・・昔から怖がりな癖に結構難しい」と言いやがつて
さあて、さつさと準備するか・・・
敵さんが気づく前にやらないとな
ただの孤城戦じや勝てないしな」

薫は不敵に笑みを浮かべる
スイッチが入ったのだろう

「ハハハ、薫やる気出たんだ」

「ああ、それに今思えばストーリー通りじゃねえか
プレデターが出た時点でドイツ国境沿い防衛戦のストーリーが始ま
る前だつたんだ

あのストーリーだと2人の諜報員の犠牲でプレデターというアメリ
カの武器が使えるようになつたって説明あつたろ?」

つまりその2人は俺たち
だが生憎、俺たちはストーリー通りの2人じゃないからな

「そういえばそうだよな・・・

で、孤城戦やるにも

まずは脱出ルートの確保だよな
やつぱり電車が一番なんだけどあの検問がキツイしな・・・」

そう悩み始める咲樹を見た薰は笑いながらポンポンと咲樹の頭を優しく叩く

「つたく、脱出ルート考えずに決めたのかよ

んなもん―――」

「ここから始まつた

咲樹と薰にとつてここからがより過酷で、仲間もいない『2人』だけの戦いが――――

「密入国に決まってる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846s/>

スナイパー & アサルト

2011年11月20日00時16分発行